100周年記念資料

2. 風　　韻

成　瀬　善　髙

—目　　次—

I. 蓮霧の庭 …… 1
1. 麻竹の橋 …… 1
2. なく守宮 …… 6
3. 僞茎のバナナ …… 8
4. 麻竹の水 …… 10
5. 微粒の種 …… 13
II. 峠の秩父 …… 15
1. 水の樹 …… 15
2. 身を刺す寒風 …… 25
3. 職人気質 …… 29
III. 冬ぬくく …… 33
1. 記憶のかげり …… 33
2. 銀杏の木 …… 40
3. 白いかげ …… 47
IV. あとがき …… 51

I. 蓮霧（レンブ）の庭

1. 麻竹の橋

1937年3月，学校長より「東京帝国大学農学部附属台湾演習林勤務を命ず」。の辞令をいただき，同年5月東支那海を一路南下し，基隆港へ向かう大阪商船の三等客として乗りこんだ。父が熊本市まで出掛けて買ってくれた革製のトランクを提げて，三等室の座敷の中央に陣取る。ガランとした室内には，船底の丸い窓から5月の日差しが柔らかく差し込み船内の埃が光芒のなかを浮遊している。親のもとを離れ異郷の地で暮らすのかと考えると，あらためて胸がジィーンと熱くなってくる。「九州男児だぞ」と自分で自分にいいきかせるように，ぐっと唾をのみこむ。船は然程ゆれもせず汽鑵のエンジンの振動音が体を震わせる。ここで二晩過ごすのかと思い甲板に出てみた。九州の山々はもう遠く淡い影となり後へ後へと下がってゆく。再び船室に戻りトランク

の中から，持ってきた昭和10年度芥川賞受賞作石川達三の「蒼氓」を取り出して読みはじめた。つい一ヶ月前満蒙開拓の移民として見送ったAさん一家のことを思い出しながら，口に出してはいえないが，官憲支配の非常時態勢の近づきつつある，お国の為という重苦しい世相においつめられてゆく不安な時代であった。船酔いもせず航海の最初の夜が更けてゆく，丸い窓の外に暗い海がひろがって，水平線上に銀色に光る月が浮き出たところである。玄海灘をぬけて南にむかう船のディーゼルエンジンの響きが枕につたわり，なかなか寝付かれぬ。翌朝起きるとすぐ洗面とトイレを済まし朝食に出かける。飛魚の群が船あしを追いかけて，銀鱗を光らせ飛び跳ねる，甘酸っぱい潮風が頬を撫ぜて吹く。そんなことにはおかまいなく船は，ただ一途になんの変化もない碧い空と海原の果てしない水平線に向かって進みゆく。昨夜は左舷のやや船尾よりから昇った月が，今夜はもうすっかり後(うしろ)に廻っていた。舷下に砕ける白い波は泡沫をたて，その中に夜光虫が光りながら流されてゆく。船は夜のうちに九州の南端を通過し，南の島々あたりの沖を走っているのであろうか，朝から南風が吹き気温も高まってきた。眼が覚めたときには船は基隆島の島々の間を通って，基隆市街のみえる岬まできていた。山々は滴るような緑に覆われ赤い台湾瓦の屋根や土塀の家々が見え明るくて美しい。やがて基隆港に船は碇泊する。埠頭には見馴れぬ笠に黒い中国服の人達が甲高い声で喋りながら右往左往している。時折チューインガムを噛む様に，ビンロウジュウの未熟実を咀嚼しながらペッペッと真っ赤な唾をはく異様さに驚き，なんとなく混然とした感情が漠然とした不安感となり胸さわぎを起こす。下船して汽車で台北へ向かった。駅前のホテルに泊まり夕食のデザートに見たこともない果物が出された。パパイヤと説明されたが，黄熟のプーンと臭うので手をつける気にならなかった。その夜警察の一斉検問に会う，支配人の案内でやってきた警官は，傲慢な態度で威圧的な尋問をして立ち去った。あとで聞いたら宮様の旅行中との話であった。翌朝台中行きの列車で，台湾演習林事務所へ向かう。演習林林長（当時は派出所主任といっていた。）の苫名孝太郎先生は外遊中とかで，次席の久保田助手に出頭の挨拶をし，今尾清九郎さん（後に演習林本部の事務長），会計係の筒井さん，経営係の五味さんらに挨拶し，その夜は指定の旅館に泊まり，翌日竹山作業所へ出張される林さんの案内で竹山へ向かった。二水の駅で汽車をおりそこから乗合バスに乗る。途中河幅100 mもあろうか濁水渓にさしかかると，バスは川原を走り，浅瀬を対岸に向けて走りゆく，橋梁などはない。増水の時はバスは運休し，人々は1本のワイヤーを渡した吊篭に乗り，索をたぐって渡るまるで曲芸の様な渡し場になりますよと林さんが話してくれた。対岸のなだらかな丘には甘蔗畑がつづき，谷間や河岸にはヤシと麻竹が生い茂っている。特に麻竹は目通り30 cm位もありそうなデッカイ竹が叢生し，巨大な筍がヌキヌキと生え出ている。なる程竹山庄という名の通りだと感じた。裸の子供達が大きな水牛を，のんびりと草を食べさせながら歩いている。停留所に着くと，纏足をした老婆がよろけるようにして降りた。すると跣で黒い服で髪を長く編んだ娘さんが乗りこんで，顔みしりの乗客と早口でお喋りをはじめ大袈裟な身振り手振りの会話に，なんとなく楽しい雰囲

気となる。バスはやがて竹山の街に入る。「もうすぐです」と林さんの声に準備をし停留所に着き降りると熱帯樹が亭々とそそりたつ。洋風で瀟洒な建物が見えた。石の門柱に「東京帝国大学農学部附属台湾演習林竹山作業所」。と墨痕鮮やかにおもおもしい厚板が下がっている。門を入ってゆくと大勢の人が玄関前で迎えてくれた。早速作業所主任の古谷東一助手に出頭の挨拶をし，原敬造助手をはじめ，市川さん，大石さん，川原さん，高木さん，それに平良，北村の両君，陳さん，鄭さん，林さんの紹介をうけ，「宜敷くお願いします。」と頭を下げた。原助手は試験係主任。市川さんは調査係。川原さんは渓頭(ケイタウ)保護所主任，高木さんは長潭仔坪(ツンタマベン)保護所主任で皆さんが年配者で，試験係の大石さんと，平良(たいら)，北村の両君（同輩で４月に赴任）の３人が独身で，構内の一番奥まっただだっ広い官舎に住み，私もそこへ仲間いりさせてもらい同居することになった。食事は川原さんの奥さんの賄いで，蒲団や蚊帳等の夜具類は奥さんに見繕ってもらうことにして，その間を役所の備品を借りる。翌日から早速出勤大石さんから作業所管内の四ヶ所の気象観測の月報データをいただき，その平均値の計算をはじめた。手動計算器があったが，初めて見たぐらいで使い方もわからないので，筆算ではじめる。退庁後手動計算器をお借りして，大石さんに使い方を教えて戴いた。５月から９月一杯までは夏時間勤務の半ドンで，まごまごしているうちに昼となる。計算器を使い始めるようになってからは，仕事もはかどり楽しくなってきた。竹山，渓頭，長潭仔坪，亀子頭(クワタウ)の夫々の平均気温，年雨量などの数値を求めながら比較してみると，まず気温の高いこと，雨量の多いこと，しかも６〜７月に集中的に降り，10〜12月は極端に少ないことなどをしった。丁度雨期に入る季節で毎日きまって午後はスコールがやってくる。するとさしもの暑さも一ぺんに消されて涼しくなる。湿度が低いので蒸すことはなく，カラッとした大気だ。主任の古谷さんは，スポーツマンで，テニス，野球，弓道なんでもやられる。午後になると我ら若いものを呼び出し小学校の校庭でよくやらされた。野球も演習林チームを編成して，近くの製糖会社のチームとの対抗試合などし甘いコーヒーをご馳走になったりした。川釣りもお好きでよくお伴(とも)させられた。竹山川を流し釣りしながら下る，途中スコールに会いバナナの葉を傘代わりにして帰ったこともあった。或る時赤いタオルを首にひらつかせ水牛に追い掛けられた時は驚いた。官舎から50ｍ位の処に洗濯屋さんがあり，ご主人は60才位の小柄な人で，奥さんと25〜６才の娘さんの３人暮し。娘さんは一寸器量よしの姐さん気取りの女(ヒト)で，よく私たちの面倒をみてくれた。シャツや服などの見立てをして，台中あたりから買ってきてくれ助かった。主人は自称将棋名人で，竹山の街でも指折りに数えられ，飛車，角落ちでテコンテコンにやっつけられ口惜しくて，毎晩のようにみんなで通った。そんな日常がつづき土地の雰囲気にも馴れ三ヶ月が過ぎた。そろそろ現場の仕事にもということであろう，北村君が最初に大石さんに連れられて，渓頭保護所に試験関係の仕事で泊まり込みで，あとを追うように平良君が市川さんと調査のため亀子頭保護所に出かけた。残された私は広い官舎で一人留守番をしていると，４日位したら台中から五味さんが出張でこられ手伝いが欲しいと私を連れてゆくことになり，鹿谷庄の頂城という

部落の戸長の宅に泊まりこむことになった。仕事は鳳凰山索道計画予測線測量の補助で，大水掘台地のはずれ鳳凰山の山麓，戸長とは部落長のことで，張糞という奇妙な名である。親族4～5世帯が一緒に住む広い屋敷の中庭をコ型に囲む平屋の中央に先祖を祭る廟があり，そこに蔣介石総統のデッカイ写真が飾ってあった。丁度日支事変の始まって間もないときで，なんとなく祖先の国の不安が気がかりになるのであろうか。毎朝4～5人の手伝いにくる作業員の仲間でも戦争の話でもちきりで，作業はさっぱり捗らない。台湾語で喋りあうので私はわからないが，五味さんは少し話せるので時々注意されていた。なかには反抗的な態度をとるものも出てきたので，みんなで話し合うことになり，五味さんが言葉のわかる少年を通訳に日支事変の目的や，亜細亜民族の平和確立のためだというような話をされた。こんごも誤解のないように互いに話し合うことを約束し，納得してもらい作業も順調に進む。台湾統治から40数年経た今日なお本島人には，差別と抑圧の不満からくる不信感があるのかと思いしらされた。鳳凰山索道は，垂曲線索の理論の苫名孝太郎博士の発案で，渓頭～長潭仔坪～亀子頭～水裡坑を結ぶ，清水溝事業区の主動脈となる軌道の中継点で，鳳凰山(1697 m)の切り立つ岸壁の下を流れる清水溝を跨ぎ，対岸の樟湖の台地と結ぶ釣瓶式索道で，荷物の積み替えなし直接台車ぐるみ搬送する大掛かりな計画であった。その後渓頭で模型実験を苫名先生の指示で五味さんと一緒にお手伝いした。私が演習林在勤中，一貫して森林工学，特に架空線運材にかかわりをもつようになったのは，この時からである。一応の現地測量を終え，一ヶ月振りで竹山へ帰ってき久々振りの4人の生活が再びはじまった。そのころ亀子頭保護所主任が応召となり，高木さんがそのあとにゆかれ，長潭仔坪が空席となっていた。古谷主任から，その後釜として私をと指名があったが，渡台して半年もたたず，若僧の私などに勤まる筈もないとお断りしたのだが，どうも五味さんの推薦のようで強くすすめられ，ついに長潭仔坪保護所へ赴任することになった。長潭仔坪保護所は，清水溝岸の人里離れた痩せた尾根の台地に演習林関係だけの事務所，宿舎等三棟があり，作業員宿舎と物置倉庫のついた一軒家同然の処で，宿泊所の他は竹材使用の台湾式建築，柱，屋根，壁総てが麻竹を使用している粗末な造りである。電燈はなくランプ生活で，お陰でランプ掃除も覚えた。職員は定夫の福山さんと人夫頭の陳水立さん，小使いの林，頼君の二人の少年で，福山さんとは同県人で奥さんは台北育ちとか，4才の坊やと，64才のお爺さんの4人暮らしで，お爺さんは，私の父と同年輩でしかも肥後弁で話されるので，故郷の様な気分にひたれた。食事もお世話していただき家族同様にしていただき安心した。ここへ来るには，竹山の街から鹿谷行きのバスで30～40分ほど揺られながら降りてから，大水掘の烏龍茶の茶畑の台地をとぼとぼと歩き，チーク林の東埔寮の坂道を下ると，清水溝に架けられた麻竹の橋に出る。この橋は両岸より5本づつの麻竹を撓ませてアーチ型に組み，籐(トウ)で縛り合わせ30 cm間隔に割竹を並べて辷り止めに括りつけた竹の橋である。ゆらゆらと揺れる風流さはお伽(とぎ)の国の渡り橋である。それを渡りだらだらとした九十九折(つづらおり)の坂道を登る。左右は見本園になっていて，想思樹，マホガニー，フトモモ，クロガキ，キナ等の樹種がみ

える。苗畑が少しありそれを登りつめると台地となる。杉，松，油桐などの林の奥に保護所が見えてくる。庭には蓮霧(レンブ)の古木や龍眼，揚桃（スターフルーツ），荔枝（ライチー），木瓜（モッカ），バナナ等の果樹がある。特に事務所の前の蓮霧は古い大木で，庭一面に枝を張り，春には林檎の様な白い花を咲かせ，夏にはびっしりと淡紅色の洋梨型のような実が零れそうに下がる。甘酸っぱい初恋の味である。木瓜は雨期になると青野菜が不足してくるので，青いまま胡瓜漬けのようにして食べる。入口近くに作業員の泊まる小屋がある。造林時期には地元の大水掘や東埔寮，坪子頂あたりから十数名が泊まり，夜は胡弓の調べに合わせ賑やかな歌がつづく。清水溝を挟み対岸の大水掘の斜面は麻竹の林で覆われている。雨期の間はその谷間に夕靄がたちこめ，日が昏れるにつれふわり，ふわりと三々五々に鬼火(クイヤホイ)が顕れてくる。エキゾチックというよりも気味の悪い怪しげな火玉である。昔美人な娘さんが美男子と熱い熱い恋におちいったが，身分の違いから適(かな)えず清水溝の淵に身をなげ，その霊魂という悲話をきかされた。東大理学部の研究生が昆虫採集で夜は蛾を集めていた。その時の話では夜行虫の一種だろうとのことであったが，正体はつかめなかった。「鬼火」は流行歌になっていて，そのメロディーの哀調は胡弓の音律と合って物悲しさを誘う。私も原語で覚えてよく口遊んでいた。保護所の勤務時間は，これという規定はなかった様で，作業時間も夜明けから夕昏れまでという莫然としたもので，お昼休みの2時間を含めて12時間近い労働時間だった様に記憶している。特に休日の定めもなく，部落のお祭りとか，地元の風習で休むのが通常であった。作業の内容としては殆どが育林作業で，その他歩道の手入れ，電話線修理，苗畑作業等で，特に電話線は各所間を結ぶ唯一の連絡網で，単線のためよく切断したり，樹木に接触して通じが悪くなることが多くて，刈払い見廻りに出かけた。保護所主任の業務としては，管内の施業の管理，監督及びその実行で，また地元との窓口として，保管竹林の管理，払下物件の調査と検査。労務防災等の用件でよく戸長へ連絡依頼に出かけた。巡林は育林関係以外に無断開墾，盗伐防止などの監視が主であった。歩道の要所要所に巡視箱が錠前付きで設置され，中に巡邏簿があり所要事項を記入し捺印する様になっていた。久保田次席が年2～3回点検巡視に廻られ，その折質疑応答することになる。特に緊急事項はその都度電話で報告し，その指示を仰ぐことになる。月一回主任会議があり，竹山作業所に出向し，月々の事業実行及び計画の報告，賃金請求関係書類提出その他であった。賃金支払は竹山か台中の会計係が直接出張して出役者に支払いをした。地元に水柄杓や下駄作りの職人が数人いて，その材料として小量の立木の払下げをする。ウラジロエノキ，タイワンタブ，フカノキ等の柔らかい材質の樹で，これを50cm位に玉切り二つ割りし柄の部分をのこし円形に抉って水柄杓（プウヒャー）を作る。どの家庭にも厨の水瓶に伏せてある。大体一回一人当たり立木本数にして10本位調査するが，胸高直径はステッキ尺で，樹高は目測，それに曲がり，腐り等の利用率を掛け材積を計算し調査主任に野帳を提出する。下駄材はイイギリ，ハリギリ，タイワン桐などで，特に大量の用材としては，烏心石(オウシンチョウ)（おがたまのき），欅，牛樟，タイワンヒノキ，ベニヒ，タイワンスギ，タカネゴコウ，タイ

ワンツガ等である。これらは竹山作業所の調査係が直接調査にきた。地元の坪子頂部落に公学校があり，秋の運動会には生徒総勢30数名の外，部落民総出の賑わいである。駐在所のお巡りさんと一緒に来賓として，大きな菊花を胸につけ特別席に座したときは，なんとなくこそばゆい思いにさせられた。翌年福山さんが内茅埔保護所主任として転勤され，渓頭から藤田さんがこられた。藤田さんは河原さんと同郷の薩摩の人で以前巒大山の営林署の斫伐作業をしておられ，お酒が好きで私には荷が重かった。いろいろな事があり再び渓頭へ帰られた。新しく森脇公治君が赴任してきた。1940年3月台湾歩兵第一聯隊に入隊するため三年余り住んだ長潭仔坪をあとにして以来今日まで訪れることもなく過ごしてきたが，成年期前の10代をよく頑張ったと今更ながら若さというものの強さを感じるのである。

一葉づつ思ひおもひに流れゆく
紅葉恋へとや懸け橋の峪

〔白夜の翳〕より

2. なく守宮

ここはまた毒蛇とマラリヤの巣窟でもあった。とにかく毒蛇の種類の多いのには驚く。実数は内地よりも少ない様に思うが，ただ猛毒性で順にならべると，まず台湾コブラ，台湾ハブ，百歩蛇，蝮，青蛇等である。冷所を好み案外綺麗な場所に住み，暗い汚い藪にはいない。百歩蛇に噛まれると百歩あるくうちに毒が躰にまわり死ぬという。青蛇は青緑色の肌をして樹上にいる。それぞれ棲息場所を異にしている様だ。よく脱いだゴム長靴の中でとぐろを巻くから注意せよと揶揄半分で注意をうけた。噛まれては大変だと毎朝履く前に慎重に点検することが癖となった。林内には猛獣らしい動物はいない。猪，小鹿，猿，兎などの哺乳動物で，栗鼠（りす）は備え付けの猟銃で巡視の折によくとらえ，害獣として一匹幾らかで役所で買い上げていた。気楽な山歩きで身の危険を感じることはなかった。ただ山蛭の多いのには閉口した。一日山歩きしてくると数匹の蛭が脚に丸々と血を吸って下がっている。そっと口が残らないように気をつけて離すと，血がどっと噴き出す。刻み煙草をもらい血止めにつけるが当分は痒い。この山蛭は巻脚胖や地下足袋の鞐（こはぜ）の間や薄いズボンの織り目からでも細長く糸の様に伸びて侵入してくるので仕末が悪い。ある日巡林中脳寮に立ち寄り蛭の点検をしていたら，主人が脳油を持ってきて付けてくれ，これをあげましょうと小さな瓶一杯をくれた。脳油は樟脳を作る際に出る副産物で専売品になっている。内緒で分けてもらった脳油を脚胖や足袋に染ませて歩いてからは，蛭が付かなくなり大変助かった。そんな状況なので，竹山や台中からくる会計の人達は，皆ゴム長靴でやってきた。ある時台中から支払いにきた筒井さんが，夜したたか酒を飲み，翌朝二日酔いのドロンとした眼で縁側に脱いだ自分の長靴に黒い長いものが頭を出している。「蛇だ，毒蛇だ」と突然騒ぎたてた。吃驚して

いってみたら自分の靴下であった。またある夕昏れに福山さんの奥さんが頓狂な声で風呂場から駆け出してこられた。何かと思って行ってみると，御衛門風呂の縁に百歩蛇がトグロを巻いていた。雨期の湿っぽい日の続く折で，風呂場の乾いた所が気にいったのだろう。跨いでいたら大変なことだとその後も一つ話になった。安銀土掘の若い桧林の枝打作業の巡林にいった時のことであった。まだ枝打をしていない林の道を歩いていたら，被っていた台湾笠の上にドサッと音がしたと思ったら，長い物が地面に落ちて這っている。青蛇だ，体長 40 cm もあろうか，早速腰鉈を抜き仕末した。青蛇は樹の枝に尾をからめぶら下がり，通る獲物に噛みつくという。台湾笠はその点つばが広く軽くて涼しく，山ではこの笠にお世話になった。現地の人達はよく跣で歩くのに毒蛇に噛まれないのかなと聞いたことがある。すると毒蛇のいる場所は臭いがするので，そこをよけて通るのだと話してくれた。私にはその臭いがわからなかった。休日の日だったか退屈しのぎに下の清水溝に釣りに出かけた時のことだった。よいお天気で竿の先の浮子をみていたら眠気がしてきて，ウツラ，ウツラしていると，どこからともなく奇妙な臭気に悪感の奔る気がして，はっとして目を覚まし見ると，すぐ前に鎌首をもたげ赤い舌をヒラヒラさせて眼圧を光らしている，一匹の台湾コブラがいる。私は咄差に竿の元の部分で横薙に払った。丁度いい具合に首根にあたり蛇はたおれた。その時かいだ奇妙な臭いが毒蛇の吐く臭いであろうか。また長潭仔坪はマラリヤの巣でもあった。周囲が竹林で囲まれ，平均湿度が 82% もあるため蚊の発生には好条件である。ハマダラ蚊が多く年中蚊帳をはって寝る生活であった。夕方になると総出で針葉樹の生葉を集めてきた庭で燻し蚊遣りをはじめる。濛々とたちこめる白煙が家の中の蚊を追い出す，小一時間程燻しその間に蚊帳を張り戸障子を締め切るが，暑い夜には締め切っておるわけにもゆかず，かといって開けるとまたワッと蚊がはいりこむので，蚊取線香は絶やしたことはなかった。この蚊に刺されると，マラリヤの原虫が体内の血球内に寄生して，隔日に高熱を発する三日熱と，最初の発作から二日平温があって四日目に高熱を発する四日熱。それに悪性の熱帯熱の三種の病状がある。いずれも最初に悪寒がして体がガタガタと震えが止まらず，寒くて寒くて何枚蒲団かけても寒い。それが 1〜2 時間つづくと，今度は熱が出てきて 40 度近くまであがり，高熱で苦しむ風土病である。長潭仔坪に移り住んで一月(ひとつき)程した頃ついに三日熱に罹った。三日熱に冒されながらも寝ていると嘘の様に癒り，3〜4 日ぐらいするとまた発熱する。そんなことを繰り返しているうちに，だんだんと食欲がなくなり，体調が気怠くなってきて脾臓がおかされてくる。現地の子供達で，よく布袋様のように下腹をはらした子供を見かけるが，マラリヤの常習者で脾臓が腫れた重症者で一寸した衝撃でも脾臓が破裂して死に至るとかで注意する様にとの話である。一ヶ月近く我慢していたが癒る様子もなく，竹山の病院で治療をうけることにした。2 週間程注射や検査をうけ，その後は予防注射とキニーネ薬を服用して発病することはなかった。南支戦線に出征しているときに，天狗(でんぐ)熱と熱帯熱マラリヤに罹った。このデングねつはネッタイシマカ，ヒトスジシマカにより伝搬される，高熱を出し筋肉痛と発しんが特徴であり死亡に至ることはない

が，熱帯熱マラリヤは死の恐怖をともなう悪性で，幾人かの戦友が死んでいった。パナマ運河とマラリヤの話を小学生時代に聞かされたが，多分この熱帯熱マラリヤであったのであろう。幸いに台湾の風土病としては三日熱か四日熱位で悪性という程ではなかった。また夜になると守宮(やもり)が出てきて，ランプの光に集まる蛾や羽虫を捕食にくる。暗いランプの光影の天井をチイッ，チイッと哀れな鳴き声をして吸盤で走り廻る。毒蛾を食べるとその毒素が尿に含まれ，これをかけられると皮膚が爛れることがある。私も一度蚊帳の中で寝ていて，守宮の排尿をかけられて顔をひどく爛らしたことがある。八年程前に中国の桂林に旅した時，宿泊した古い飯店の天井を守宮が徘徊していたので，旅の一行に注意するようにと話したことがある。

梁高く天井の隅になく守宮(やもり)
　忌わし戦(いくさ)の哀しみきえず

〔白夜の翳〕より

3. 僞茎のバナナ

保管竹林は，我国の統治以前から現地住民の唯一の収入源であり，生活の総てといってもいい位である。この麻竹の林は干筍（支那竹・メンマ）の製品だけではなく，竹幹は建築用，竹筏（テッパイ）用の材料で，食住のもとをなしている。中国大陸との交流もこの竹筏が主役であった。鄭成功がオランダ人の本拠地台南の城を攻略したときこの竹筏が活躍したと伝えられている。麻竹はそんな歴史をもった住民の財産である。それ故演習林に移管になってからも保管竹林という特別な取り扱い方がなされてきた。即ち地権はないが，利用権があり，竹産物の採取売払管理，立入りなど自由であり，代々世襲としてその家の財産ともなっている。干筍製造の時期になると一家総出で林内の小屋に寝泊まりして，根廻り 40～50 cm もある筍を切り取り，刻んで大きな釜に据え付けた蒸し器に入れて蒸す。それを内側にバナナの生葉を立て並べた高さ 2 m 程もある荒の目の竹篭に，蒸したての筍を入れ軽く踏みつけて 3～4 日この中で醗酵させてから，広い竹の箕にパラパラとひろげて天日に干して乾かせば支那竹が出来上がる。これを仲買人が買い集めて本島はもとより，中国大陸へ輸出されて，おいしいラーメンの添え物になる。その季節になると方々の麻竹林の小屋から若い娘さん達の楽しい唄声が流れ賑やかな風景である。この麻竹は，普通の竹類とは違って地下茎が伸びて繁殖するのではなく，根株が肥大しながら叢(むら)がりとして増大してゆくので，時折境界での株の争いがある。申し出があれば，その都度境界線の裁定に出かけた。測量機を携えてゆき，お互いの言い分を聞きながら裁定線を決定するのだが，双方に損得のないように公平な境界線を決めて納得してもらう。賑やかだった支那竹作りも終わると，竹林は再びもとの静けさをとりもどし，時折竹と竹が擦れ合う音だけが林内に谺して来春を待つ。台湾には竹の種類が多く年中何らかの竹の筍が食べられる。カラタケ，棘竹，クロチク，モ

ウソウ，ハチク，アワタケ，コウナンチク，麻竹その他で筍の出る時が違っている。棘竹は字の通り鋭い棘(とげ)があって藪になるが竹幹は質が強靱で天秤棒として最適でよく使用されていた。

樟の木は総督府専売局の所管で，演習林は及ばず民有林内でも，天然木，造林木を問わず無断で伐採利用することは出来ない。専売局の認可が必要で，専売局専属の樟脳製造夫の手で伐採され樟脳製造に使用される。演習林の林内にも処々に脳寮があり，これらの人達が住み樟脳造りをしている。巡林の際よく立ち寄ってはお茶などご馳走になった。子沢山の夫婦が，夫は樵作業で樟を伐倒し玉切りして脳寮まで運ぶ，それを妻がチップ状に削り剝ぎ，蒸溜槽につめて蒸気で蒸溜する。蒸気は冷却水槽に導かれ樟脳が結晶されていく。その際副産物として脳油も出来てくる，両者とも専売品である。昼夜燃しつづける脳寮の広い庭先でコッコッと木端(こっぱ)に削り剝ぐ音が静寂な山峡に谺して，小鳥たちの囀りと調和して深山の妙音を奏でてくれる。土間では幼い姉弟が篭の中の赤ん坊を子守しながら，木の根や枝の瘤などを玩具にして遊んでいた。大自然の中で自分の想像により選ぶ自然物の遊具で楽しく遊ぶ子らのあどけなさに，幸多かれと祈りたい気持ちになった。ここをあとにして安銀土掘の植林地を巡林する，途中までくると先の脳寮のおかみさんが息せききって追い駈けてきた。人が殺されているという，そして現場まで案内してくれた。山ひだの峪間までくると，俯(うつぶ)せに男の人が倒れていて，あたり一面血に染まり洋傘や手持品らしいものが散乱していた。「誰だろう」と尋ねるとおかみさんは，「たぶん下駄職人の親方だろう」と風采などからみてと。そういわれると数週間前に下駄材の調査にきたことがあった。職人達の見廻りにきたのであろう。私は早速引き返し保護所から竹山作業所へ電話し，事情を説明して警察へ連絡をお願いした。翌日多勢の警察の人達がやってきて現場へ案内した。検死の結果背後から草刈鎌のような鋭利な刃物で後頭部を何回も切り付けられ，死亡時刻は昨日のお昼前頃だろうと推定され，早速犯人捜査がはじまった。それから一週間程経って，殺人現場から雑木林の暗い山道を3km程下ったナマテンというバナナ栽培をしている十数戸の部落の唖の青年が容疑者として捕えられた。この部落は演習林で入植させて植林とバナナ栽培を兼ねて生計をたてている人達で，あとで聞いた話ではその朝殺された下駄職人の親方が，この青年を嘲弄するような手振りで，財布の中身など出して見せながら水裡坑の遊興街の話などしていたのを見掛けたという人の証言から白羽の矢が立ち，調べの結果親方と別れた後青年は尾根の近道を通り現場で待ち伏せして犯行に及んだということだった。私もこの青年に幾度か合って挨拶も交わした。真面目によく働く青年であったので一時信じられなかった。それにしてもこんな山奥で娯楽もなくただ働くだけで，障害者というハンデを背負った若者が肉体的には充分な男を，悪戯(いたずら)半分に揶揄した親方の非常識な差別意識に強い腹だたしさを感じ，無知な青年が不憫でならなかった。事件が片附き部落にも元の平静さが戻ってきた。この部落は台湾演習林第三次経営案に基づき普通施業地拡大策として，人工造林面積の倍増を図るため土地を無償で貸付け，天然生林を伐開火入れ地拵えして，バナナとともに演習林の支給する杉及び広葉杉の苗木を同時に植栽し両者を育成しながら，バナ

ナの実の収穫は開墾者の収入となる。即ち造林費節約の施業目的で実施され，4～5年間バナナ栽培していると造林木が生長し収穫も少なくなるので次の開墾地に移動する。私の在職中に40 ha程の新植地が成林した。管理指導のため鄭君が駐在員として常駐し，巡林の際の宿泊所にもなっていた。部落民のなかに内地人で小西さんという人がいた。本島婦人と結婚し子供さん達は夫々に成人して就職しているとか，まったく本島の人達と変わらない生活をしていた。過去のことは一切話ししないのでわからない。しかしバナナ畑の植林については厳しい意見をきかしてくれた。現在の一戸当たりの面積のバナナ栽培では充分な生活収入にはならない，少なくも現在の倍位にしてもらえないかと申し出があった。早速上申して善処方をお願いし，翌年から栽培者本人の希望もきいて実施されることになった。しかし入植者の子弟達は辺境の地ゆえ教育をうける機会さえない文盲の子ら達である。小西さんと相談して，公民学校出身の頼君と鄭君の応援を得て，これらの子供達に読み書きと，簡単な算数を教えることにした。部落の大人達もよろこび勉強が終わるとバナナやパイナップル等の自前の果物で一寸したパーティーとなり，四方山（よもやま）の話に花が咲く。中秋名月の夜は豚・家鴨・鶏等の丸焼きや山菜の台湾料理での酒盛りとなり，賑やかに胡弓の樂で唄い騒ぐ一夜であった。遠く日月潭の連山がぼんやりと浮き出された晴れた月夜に幽かに夜汽車の響きが風に乗って聞こえてきた。深い眠りの谷間から子鹿らしい啼き声がする。仙境で暮らす味わいをしみじみと感じる。部落の人達の中には，いまだに差別と搾取の不平等な統治政治からのがれられず，赤子を栄養失調で亡くし，家計の足しに娘を身売りさせた悲惨さに堪えねばならぬ深い傷痕が癒えぬままの人々がいる。バナナ畑には収穫で取り残された役立たずのバナナの房が僞茎の幹に黄熟したまま月の光に照らし出されていて，何かを訴えているように見えた。

音荒く砂吹きよせて風過ぎぬ
　風紋なんぞ影を深むる

〔白夜の翳〕より

4.　麻竹の水

1938年の春，当時の演習林林長三浦伊八郎先生の台湾演習林視察があった。水裡坑の新高作業所から亀子頭を通り長潭仔坪を経て渓頭へと巡られることになり，籐椅子の駕篭を仕立てて亀子頭保護所まで迎えにゆく，途中樟，油桐，想思樹，さるすべり等の造林地を案内しながらくる。時折造林成績などの質問をうけるなどして，やっとのことで長潭仔坪に着いた。宿舎で用意された昼食をとられ，その折「若いのによくやってくれて有り難う」とお言葉をかけられ感激したことを今でも思い出す。その後出征し廣東の軍司令部勤務中南方へ渡航される先生にお会いし挨拶したら，覚えていてくだされ，後でご馳走になったことがあった。6月になると利用教室の福田

次郎先生と秩父演習林主任住田芳太郎先生のお二人が視察にこられた。福田先生はその後苫名先生が朝鮮総督府に出向され，その後任となられ台湾演習林主任をされ，戦後は高知大学教授として森林利用研究会でお世話になった。住田先生とは復員後秩父演習林勤務となり十年近くお世話になった。その出合いが長潭仔坪であった。両先生を案内して清水溝の竹の橋を渡り東埔寮のチーク林を通り，大水掘の戸長頼文有さんのお宅で一休みした。この戸長さんは先代から演習林とは深い関係があり，創設当時境界線や保管竹林関係で大変お骨折りいただいたとか聞いている。長潭仔坪勤務の頼君のお父さんである。ここは凍頂ともいって霜のおりるほど冷ややかで，霧が深くてお茶の栽培に適し烏龍茶の名産地である。赤い土の丘には茶畑がつづき，お茶摘みの時期には家族総出で徹夜の製茶作業がつづく。広い中庭を囲むように建てられ三院式住居には，親兄弟5世帯の住む大家族で，その隣に製茶工房が並ぶ。美味しい烏龍茶をご馳走になりながら，纏足の文有さんのお母さんが82才とも思えぬような元気な声で烏龍茶の由来など話してくれた。それによると，「良薬をつくる一本の茶の樹の根元に黒い蛇（烏龍）がまるくなってその樹を守りつづけた。」という伝説から烏龍茶というようになったそうである。ここから両先生方は車で渓頭へ向かわれるので別れを告げた。その折福田先生から8月には利用教室の学生一人が厄介になるが宜敷くと言われた。8月の夏休みになると，林科三年の佐藤喜三郎さんが大きなリュックサックを背負ってやってこられた。先に測量した鳳凰山索道の終点樟湖から亀子頭への軌道線の設計測量である。佐藤さんは数学の得意な方で，函数の数値などまる暗記でスイスイと出てくる。難しい高等数学もわけなく解かれ随分微積分を教えていただいた。囲碁も強く読みが深く，2～30手さきまで考えられる長考型だった。測量は樟湖の終点から約4km位の距離の間の林道設計で，橋梁3ヶ所を含め順勾配の路線設定であった。まず予測線の刈払いのためハンドレベルとコンパスで線をきめ刈払いしてゆく。毎朝4～5人の作業員とともに弁当持参で出かける。真夏の暑い盛りで喉の乾きがはげしいが，渓水や湧水の生水には細菌が多く飲めない，僅かな水筒の水もすぐになくなる。すると作業員の一人が梢の折れた麻竹の節間に鉈で穴をあけ，細い竹管を入れ飲めというので飲んでみると美味しい水だ，地下茎から吸い上げた水が蒸散できず節間に溜まった蒸溜水で絶対に安全である。それからは梢の折れた竹を見付けながら水分の補給をした。ただし幹に罅割れのあるものは雨水が滲透して雑菌で腐敗した水となっていたものもあり，そこで竹の水の美味しさくらべをした。各人の選定した麻竹の水をみんなで飲み比べした結果，佐藤さんの水が一番美味となり，それ以後麻竹の選定は佐藤さんの係りとなった。一通り予測線の刈払いが終わり，杭打ち，曲線設定，縦断測量，横断測量，地形測量等林道設計のための外業も終わり，9月も過ぎ秋の学期も始まるので資料をまとめて帰京されることになった。佐藤さんは私に諸戸測量学の本を送ってくれることを約束して，長潭仔坪の宿舎を引き揚げていかれた。荷物を鹿谷のバス停留所までとどける頼君と佐藤さんを竹の橋で，後姿のみえなくなるまで見送り，熱い涙がこみあげてくる。内地恋しさの涙であった。私は台湾に出てくるとき，「どうせ丈低

い体格で兵隊にとられることはないから，兵隊検査まで頑張り学費を蓄え進学しようと自分に誓った。」そのことを自分に言いきかせながら，とぼとぼと長潭仔坪の坂道を登って帰ってきた。それから一ヶ月後に佐藤さんからお手紙と約束の諸戸測量学の分厚い本がとどいた。毎晩おそくまで勉強した。その本は表紙が少し傷んできたが，今でも私の書箱に50有余年座右の本として在る。戦後藤林先生に佐藤さんの御消息をお聞きしたら南方戦線で戦死されたとか，惜しい人を亡くしたものだと哀悼の祈りを捧げた。

魂消ゆるいのちのごときをみつめをり
　白茶(しらちゃ)けし障子に夕ぐれのかげ

爆音の消え去りし闇自爆せし
　戦友(とも)いかにせむ星冴えゆるのみ

〔白夜の翳〕より

翌年8月佐藤さんにつづき林科三年の梅田三樹男さんと栗田憲三さんのお二人を連れて福田先生が来られた。この4月から台湾演習林主任となられて始めての長潭仔坪出張である。昨年のときの話などして，その夜は卒論について学生さん達といろいろな相談の相手をされ，翌日3名を案内して，昨年の佐藤さんの測量線を案内し，これからの予定測量線へと案内をした。作業員は昨年と同じメンバーで早速予測線の刈払いと予測が始まった。馴れた作業員達により手際よく作業は進行する。予定計画以上に捗った或日，丁度部落のお祭りとかで皆が休みなので，快晴でもあり山歩きしようということになり，学生さんと森脇君，私と4人で展望のよい丸馬の峠へ出かけた。清水溝と陳有蘭渓との分水嶺をなす尾根なので見晴らしがよく，陳有蘭渓の流域がよく見える。日月潭の稜線が夏空に燿きながら連なっていて，指をさしながらバナナ畑が新山で，その続きに家々が点在している部落が郡坑でその奥から蕃界となる。新高作業所管内の内茅埔，和社，對高岳の各保護所はずっと奥となり，トロ路が通じているなどと眺めながら説明をする。日月潭には私もまだ行っていなかったが，小学校6年生の頃霧社事件（1930年）があり，先生から日月潭の奥の蕃社だと聞いたことがある。日月潭は淡水湖で別名竜湖ともいわれ，湖中に光華島という小さな島があり，それを境にして北半分を日輪，南半分は半月の孤の型をしているので日月潭とよばれるようになった。標高720 mの高所にあり湖面に霧がたちこめ，それが水墨画を描き出す景勝の地である。対岸は蕃界で熟蕃の人達の生活や踊りを見せてくれるそうだと話をした。するとそれではこれから行っても帰れるなら行ってみようと相談がまとまり，山の坂道を転ばんばかりに駈けおりた。ほんのせせらぎほどの流れの陳有蘭渓を渡りトロ路(みち)に出た。ここでは手押しトロは荷物だけではなく人も乗せて運ぶ竹椅子があり，2人掛けで下りはいいが，登り坂

では乗客はおりてトロ押しを手伝う唯一の交通機関である。暫く待つと水裡坑行きのトロがきたので二台に分かれて乗り，水裡坑から日月潭行きのバスに乗り替える。木製のバスは，カーブの多い坂道を車体をギイッコ，ギイッコと軋ませながらようやく登ってゆく。30分位もかかったかやっと日月潭の汀(みぎは)の茶店前に着く。バスを降りて早速ボートを借り対岸の蕃社の部落に向かった。ここの蕃人達は観光馴れしていて，片言の日本語も話せる。草葺きの蕃屋に案内され，蕃刀・蕃弓その他狩猟生活の道具や器具などが陳列してあり，原始生活の様相に一寸驚いた。霧社事件が差別と人権無視から起きたことの真実性を見る思いであった。民芸品の細工物を買い蕃社の庭で，杵歌の踊りを見る。素朴で単調な唄にあわせ，長い稗搗き杵をトン，トンと音させながら廻りながら踊る。終わってから踊り娘(こ)たちと一緒に記念写真をとり，再びボートで引き返した。さき程の茶店で遅い昼食をとっていると，急に空がどんよりと曇ってきて，一瞬暗くなったかと思うと，馬欠で水を零す様な勢いでスコールが降り出してきた。みるみるうちに道路は川のように雨水が流れ，店の庇を叩く雨水の劇しさ，商品は濡れっぱなし，まさに阿修羅と化した。一時間程も降ったか，さっと止みまたもとの晴れ空がのぞいてきた。バスも運行を始めたので水裡坑までくると，今朝渡った涸れたような陳有蘭渓は，堤防を乗り越えるように濁流滔滔さか巻きしながら流木などを押し流している。大洪水だとても今朝の路は通れそうもないので，坪子頂へ廻ることにして，集々の街まで汽車で来てみると濁水渓も同様の洪水，帰る術をなくした私達は，竹山の作業所に一晩厄介になる外はないと腹をきめバスで竹山へ出た。とうに日は昏れて，事務所で原主任に事情をお話して泊めてもらい，翌朝草々に長潭仔坪に帰ってきた。スコールの恐怖をしみじみと知ったとんでもない一日であった。そんなことなどあったが測量は順調に進み，外業，内業とも大分の目安もつき，梅田さんと栗田さんは台湾へきたついでに旅行をして帰りたいと，8月末に長潭仔坪を引き揚げられた。昨年の佐藤さんのような感傷もなく別れ，自分ながら少しは大人になったかなと思うのだった。

セレモニーの生贄(いけにえ)に哭く神あらん
　馬追虫は草にひそめり

〔白夜の翳〕より

5.　微粒の種

台湾の風土病であるマラリヤの特効薬は塩酸キニーネで，この含有量の多い南米アンデス原産のアカネ科の規那が古来インカ族の間で熱病薬とされていたのを，1865年オランダが種子を買い付けジャワ島で栽培に成功した。このアカキナノキは常緑樹で高さ30mにもなり，樹皮は赤褐色で葉は対生広楕円形で堅い。白色小形の花が枝頂に円錐状に集まって咲き，種子は微粒である。台湾演習林でも規那の栽培歴史は1912年以来のことで，台湾島においては最も古い，1921

年には有水坑に規那成長測定試験地が設けられ，試験結果は演習林報告に発表されている。1937年より規那も経済林として一般施業に繰りこめられ造林を開始した。翌1938年には竹山作業所内にキナ皮分析設備も設置され本格的な取り組みとなった。長潭仔坪保護所においても規那植栽適地試験及び育苗試験を始めるため長潭仔坪苗圃に播種床を設けて規那種子を播種したが見事に失敗した。私は有水坑と環境の似た湶浸(ソワチン)がよいと考え原生林の平坦地を伐開して開墾し播種床を作った。床の土としては古い大木の空洞にたまっている腐植土を用い，直射日光から守るため，屋根は竹瓦にし周りを竹の簾で三重に囲い，そこに播種した。なにしろ微粒な種子なので軽く風にもとび，さりとて厚く覆土すれば腐るという難題なものである。思った通りよく発芽し稚苗も育ち少しづつ陽光に馴らすため成育段階に応じて簾を一枚づつはずしてゆき，陽光にあてて建苗を育てていく。見事に成功し10 cm程の苗木に育った。第一回目の床替えとして15 cm間隔に床付けし日除けの簾をかけ，夜は開けて夜露にあてる。更に二回目の床替えで60～80 cmの山出し苗を育成した。育苗方法に自信を得た私は，苗畑を拡張すると同時に造林をする場所も選定し，平坦地かもしくは緩傾斜の南向きの地形を選び50×50 mの植栽試験地3ヶ所を設けて地拵えをした。そこへ山出し苗を1区500本づつを2 m間隔に植え付けし，毎月のその幹茎と幹長を測定した。当時湶浸の道を一日おきに通いとおしたものだった。気象データもとりたいので，湶浸に常駐する駐在員の小屋を建て，気象観測器材を設置し，林有石君が常駐した。湶浸の本格的な規那栽培を始めると同時に翌年は，鳳凰山の奥の密林の中にも2ヶ所程の規那栽培地を設け，1939年10月植付けした。その後2回程生長の測定に行ったが，どうなっただろうか。1940年の2月最後の湶浸の試験地測定に行ったとき樹高3 mにもなっていた。1年に1 mも伸長した生育振りである。約3年かけて努力した規那栽培試験はこの様な成績をあげ，規那植栽の基盤が出来た。出征のため去る日も近くなった或る日湶浸の林君がきて，「規那の苗が泣いていますよ」と告げてくれた。翌日早速湶浸の規那床を見にいった。播種床中で10 cm程に伸びた稚苗が朝露の玉を抱き，楕円の幼葉は涙に濡れた瞳のように見えた。私は目頭を熱くし，元気に育てよと言葉をかけた。それから規那植栽地を巡り規那一本一本に別れを告げるごとく触れながら歩いた。果たして再びこの規那達と会える日があるだろうかと，拡大してゆく日中戦争へ出て征く私にはその保証はない。そして湶浸をあとにした。長い長い戦地での戦(いくさ)のなかでマラリヤに罹り，復員後もしばらくマラリヤに悩まされたときキニーネを服用する度に湶浸の規那のことが脳裡に浮かんできた。私が千葉演習林在職中音頭をとって1970年に清澄の教官室で，台湾演習林職員の仲間の集まりである台湾会の発会を催したことがある。原　敬造先生を会長として，11名の方々が集まり台湾時代の憶い出を語り合った。あれから早20余年たち，今尾さんをはじめ高木さん，内川さん等8名の方々が他界された。台湾演習林も杳(とお)い夢物語となり消え失せようとしている。しかし1902年創設当時の西川主任以来敗戦の1945年の40有余年の間故人になられたこれらの先輩たちのご苦労を偲ぶとき夢としてすまされない思いで一杯である。

あの林檎の花のような純白な蓮霧の花に包まれた長潭仔坪保護所の庭に佇(たたず)む若き日の自分を思い浮かべながら筆を進めてきた。拙い文ではあるが，青春の若さ一杯で生き抜いてきた長潭仔坪の生活が，その後演習林に50年近い勤務をしてきた私の思想の原点となっていたことを改めて知ることが出来た。

振り向けば風とほく風のおとしたる
　原罪のごとき足跡ばかり

〔白夜の翳〕より

II. 峠 の 秩 父

1. 水の樹

「峠は秩父の心です」。秩父の邑(まち)で一生を終えた山岳写真家清水武甲さんの「秩父秘話」の一節である。秩父は四方山にかこまれた盆地だから，どうしても峠を越えなければならない。武州平野へ出る鳥首峠・山伏峠・正丸峠・定峰峠・粥新田峠・釜伏峠・札立峠。上州へ越えるには上坂峠・矢久峠・志賀坂峠。信州・甲州へ抜けるには十文字峠・雁坂峠等ちょっと数えても十数ヶ所もあり，これらの峠を越え外界と結びついている。亡き妻の遺歌集「蚕豆の眉」の序文を書いてくださった，歌人藤田　武氏は「ぼくに，秩父路は近いようで，いつも遠い。武蔵野から奥秩父の山塊へと移りゆくその接線は，なぜかぼくには，生者と死者とがまじわる所としてあり，さまざまな夢が織りなされているように思われてならない」と書いている。峠路を歩くと，人生についてしみじみと考えさせられ，人の暮らしがいとおしく思われてくる。信州川上から十文字峠を越え樅・栂などの天然林の鬱蒼とした馬の背の尾根道を下ってくると急に視界がひらけ，夕陽のなかに屋根のトントン葺きの杉皮がとばないように石の重しを載せた栃本の部落が見えてくる。私には栃本というひびきには，ひどく濃密な花の香がせまってくるような気分にひたる。山深い渓間の清流に無垢な花の姿を映す。栃の木の小さな5枚の花びらが恥じらうごとく淡紅色を帯び。空に向かっていくつもの花穂が恋を求めて咲き競う。甘酸ぱい香をまきちらす清らかな愛人だ。そして冬は熟した実はこうばしいトチ餅として囲炉裏端を楽しませてくれる。

黒揚羽群れて遊べば高木なる
　栃の白花間なし散りくる

〔蚕豆の眉〕より

その栃本部落のはずれに，高い石垣を積みあげて造成した東京大学秩父演習林地栃本作業所の洋風な建物がある。1946年10月敗戦の兵として復員してきた私は，故郷を逃れるようにしてこ

の地にやってきた。そしてここで翌年秩父市育ちの妻と結婚し，川俣の官舎に新世帯をもったのである。妻は女学校時代から短歌や詩作を学び，ここから数粁程上流の入川部落に戦時中疎開していた歌人前田夕暮氏を慕っていたので，秩父の繁華な街中から，こんな山奥にくることを然程苦にならなかった様で，むしろ憧れさえいだいていたのであろう。その夕暮氏は，「関東木材合資会社」通称丸共と呼ばれた会社の社宅に住まい，またこの会社には女学校の同級生山本イツさんもいた。秩父演習林が本格的な造林事業などのはじまったのは，大正の末期からで，特に関東木材会社が奥秩父原生林開発のため，両神から山本琴三郎氏（山本イツさんの父親）が支配人として入川に入山してからであろう。当時は炭焼や伐採夫などの家族も入居し，一時部落の戸数70余戸，人工370～380人にものぼったといわれた。この関東木材会社は前田夕暮氏の父久治氏の創業で，両神で山林事業を興し，1917年9月氏の死亡後その経営を夕暮氏が引き継ぎ奥秩父両神に入山したのが1919年でその後会社の経営を支配人の山本氏に譲り，自らも時折りこの入川を訪ねていた。敗戦の色濃くなった1945年4月，夫人を伴って入川に疎開してきて終戦の1946年12月に東京へ帰えっていった。この間の窮乏な生活のなかで，迫ってくるような急傾斜の山を開墾し畑作業をしながら乏しい食料事情に耐え続けた生活が，歌集「耕土」に詠(うた)われている。この歌集「耕土」は1946年7月新紀元社より上梓された歌集で，夕暮氏が入川の谷で，いわゆる荒土開墾に従事した一年数ヶ月にわたる苦闘の生活の結晶記録ともいうべきもので，その巻末小記に入川谷疎開の情況を次のように書いてある。

「東京荻窪の家から妻とただふたり，あわただしく奥秩父入川谷に疎開したのは昨春4月28日であった。入川谷は秩父鉄道終点三峰口から約16～7里程荒川の上流の水源地帯に近い渓谷の戸数13戸，人口70数人の部落である。この部落の生まれたのは昭和元年で，最初の区長山本琴三郎氏が，奥秩父原生林開発の為に入山したのがこの部落の新紀元である。同氏は民間稀に見る林業家であるばかりでなく，人格質実素朴のため人望篤く，一時は部落戸数70余戸，人口370～80に上ったが，数年来の食料事情は現在の戸数に減ずるのやむなきに到らしめた。然し最近入川上流の赤沢谷原生林中に新しい部落が形造られむとしてゐる。私が入川谷に初めて足を踏み入れたのは，大正14年の春で「追憶」一連の作にあらわした事実があり，直後一年に一回位は来ている。来る度に山本家の到らざるなき世話になりつつ今日にいたったので，入川谷は私にとっては到底忘れえぬ部落であり第二のふるさとのよう懐しさが多分にある。」

ただなはる秩父むら山ふもとべの
　曠野にいでて人の畑をうつ

山原に人家居(ゐ)して子をなして
　老(お)いゆくみればいのちいとほし

山胡頽(やまぐみ)はつぶらにあかし炎天の
　焼土路(やけみち)を童女ら行くも

〔追憶〔原生林〕〕より

「のみならず，私は数年前から帰農したいといふ気持ちになり，ひそかにその気持を一つの夢として，自分のうちにあたためていたのであった。私は昭和19年，歌誌10月号の巻頭言に私の気持を発表している。『吾等は耕土より生る』。天晴れぬれば地明かなる耕土に生まれし吾等は，生まれながらにして勤労をもって生活の基調とした。一日耕さざれば一日食はずといふ農民の虔(つつま)しさを，心のうちふかく浸透せしむべきである。」

飯食めば耕土おもほゆ飯はみて
　生きのひと日を完うすべし

と書いてある。歌集「耕土」は450首の歌が収められている，その全部が入川谷の所産である。以下その中より14首ほどを揚げてみる。

酸性の反應あらぬ日むかひの
　南なぞへの耕土おもほゆ

春あさき入川谷の雪解水徒(かち)わたり
　つつわが行かむとす

木の花のにほふあしたとなりにけり
　老いづきし妻をいたはらむとす

山沢の伐採あとに火を放ち
　焼畑つくる春のやきはた

自(し)がくらふものはみづから作らめと
　妻にもいひて土うちにけり

堆肥なく灰さへ乏し唯あるは
　水肥のみなり稔りがたけむ

春されば山沢人は山独活(うど)のふとき
　若芽をなまのまま食す

あまたある春山菜のなかにして
　ほとほとうれし楤のあげもの

庄蔵小屋の戸口ながるる水路あり
　うつぎのしろき花ながれくも

トロ道に蹲りつつ馬糞拾ふ
　吾をみいでてわが驚かず

山薊(あざみ)のかて飯うまくふうふうと
　吹きさましつつ妻として食(た)す

吾もはき妻もはくなる藁草履
　半日かかりほとほとにつくる

栃の花咲くらむころに黒小豆
　播けといふなり山沢人は

時計なき山の暮らしになれにけり
　起き臥しといふことの愛しさ

そしてついに昭和20年8月15日終戦の詔勅放送あり，この時の様子を次のごとく詠んでいる。

声あげてよよと泣きをる童べを
　まさめにみつつ物はいふなし

秋草の匂いをかぎて愁ひあり
　敗れし後はただに生くべし

敗戦のこの悲しみをわかつべき
　人さえあらず路ゆきにけり

山川の早瀬の音は土づたひ
　ただにひびかふわがうつそみ

新しき日本の姿みきはめむ
　いのちながらへ生くべし吾は

一皿の塩おくられていのち安し
　血液と土地と草木のあり

蠟燭のほあかりあかき秋の宵を
　あつき味噌汁わが食しにけり

赤濁みし出水の流れ速くして
　河原藷畑押し流しけり

この年はいかなる年ぞ焼畑の
　稗さへ蕎麦さえ稔らざりけり

と詠まれている。私が赴任して来た年の正月の歌である。当時作業所には，全羅南道演習林から引揚げてこられた石川さんと，私が出征した後に台湾演習林に勤務したという竹山出身の坂田君と，それに穴沢君当演開設当初から賄として勤務してこられた加藤フジさんで，妻帯者は石川さんだけだった。加藤フジさんは，早くにご主人を亡くされ，子供さん達は夫々に独立し，近々停年になるそうで私達独身者の食事の面倒をみてくれた。この歌の様に食糧事情の最悪の時で，われわれはフジ婆さんの指示にしたがって毎日畑仕事に狩り出された。川又の寄宿舎横の斜面に土留柵を作り，馬鈴薯，甘藷等の主食作物をつくり，入川部落から仕事にきていた新井君の近所の山を焼畑にして蕎麦・稗・麦などの耕作に通う。演習林に人手はなくただ軌道の補修，電話外線の修繕等はわれわれがやる外なく，ほとんどが食糧生産で精一杯であった。山薊・楤の芽・三つ葉・せり・生椎茸・蕗他などの山菜摘みも日課の一つで，これらを炊きこんだ雑炊で腹を満たした。当時の中村演習林々長の視察の折に朝昼晩と山菜の青物づくめで「私は小鳥にされたよ」といわれたことを思い出す。前田夕暮氏は，昭和21年の正月を入川谷で迎えている。大地の凍りつ

いた渓谷の真冬は耕作どころではなかった。乏しい食糧をかこいながら炬燵にへばりつき，山村生活の随想や詩作，日記に日々を過し，春の来るのをじっと待ちわびた。「入川谷山荘より」の一節につぎのようなことが書いてある。「私はこの二・三年来，心の底深く，ひそかに育てていた帰園田農の夢を，ここに来て半ば達成出来たように思い，いうばかりない歓びを感じている。何といっても肉体的には老衰しており，それに20年来の宿痾も全治したというのでもなし，白内障手術後の視力も覚束ないので，ほんとうの帰農は到底出来ない。第一この入川谷は地勢の傾斜がきびしく，平地らしい土地が殆んどないので，一層困難である。私はその峭立した土地の一角にかじりつくようにして焼畑をし，開墾をなしつつ自然順応の生活をしている。」確かに平という処は見当らない。それ故か緩傾斜な処には何々平（だいら）という名称がついていることからして，この山峡の人達がどれ程平坦な所にあこがれているかがわかる。

浜平（はまだいら）といえる部落を遠見つつ
　こほしと思ふ秩父裏谷

いきせきて胸（むな）つき坂をのぼりけり
　牛旁平（ごぼうだいら）にいたりたるかも

山原は荒れ寂びにけり稗稈の
　日に干されたるひそけさを見よ

などと詠んである。その年の7月に行方沼東氏（千演の郷台でお会いした倉田悟先生等の「日本羊歯の会」会長の成田市々会議員で歌人）と秋本藤之助氏等が訪れてきて入川谷を案内している。伐採によって変貌した山相を次のように詠んでいる。

伐りつくした山，山に別れて
　ゆく人々が今，川を渉っている

細い單軌道の枕木に雪がむら消えて
　大鋸（おが）を背負って行く人々の群

木といふ木をみな伐払った谷地の
　がらんとした明るさに対ふ

夕日かげまだみづっぽい伐りたての
　キハダ丸太は香(か)にたちにけり

これらの歌集を読むとき，私自身秩父のこの山奥で暮らしてきた数年間を振り返りみて，なぜか悲しい思い出だけが湧いてくる。荒川の上流の栃本・川又・入川の生活・そこには名前のごとく荒らあらしい渓流が，いつも烈しい水音をたてながら流れてゆく。

洪水川あから濁りてながれたり
　地(つち)より虹はわきたちにけり

と夕暮氏は詠んでいる。亡き妻もまた

つりふね草群がり咲きしわが背戸の
　草叢を洪水激ち流れぬ

洪水(みず)引きし流れ日に日に澄み
　行きつ秋晴れし風の寒くぞなりし

〔蚕豆の眉〕より

と詠んでいる。前田夕暮氏にしても，入川山峡の生活は，何故か胸深くしみる苦悩のくらしであったであろう。そのことが私にも強くつたわってくる。無医村の不便な環境で病む者の不安さが，何時もつき纏う暗い生活が根底に横たわっているからである。妻は1948年2月長男の均を秩父の実家で出産し，3月末帰山してきて間なく乳腺炎の高熱で，三週間近く荒川に張りつめた氷を砕き冷しつづけ，近所の人の煎じた薬を飲ませたが効なく，トロにのせ秩父の街の病院え担ぎこんだ。一命はとりとめたが，長い高熱が災いして胸を病みその後十余年の闘病生活に入り，山と街との離ればなれのくらしを余儀なくすることとなった。私は一人山峡で暮らしたあの日々が思い出され，いまでも哀愁が胸に焼き付いている。

二十日あまり激しき病に堪へて
　来し我が心いたく弱りたるらし

四月はじめ川の氷の残りゐし
　山の家を病みて出で来ぬ

高き熱出でて悲しむ深き寒き
山にて夫はひとり待ちをらむ

〔蚕豆の眉〕より

戦前の入山・矢竹沢・小赤沢の各造林地はほとんどが丸共の払下伐採した跡地の植林である。戦后日野原節三氏が三峰口に秩父木材会社を設立し，丸共もこれと合併し，伐採区域も赤沢に移り，小赤沢出口の森下園吉さんの伐採小屋に泊り，立木調査に入ったのは赴任してきた翌日からだった，時折り山本琴三郎氏も訪問にこられ，娘のイツさんも食糧品など届けにやってきた。丸共も長男の徳一さんが大尉の軍服でニューギニアから復員して家業に励まれ，製材工場も賑かになった。伐採後間もなく搬出された，トチ・ブナ・シオジ・ミヅメ・キハダ等の闊葉樹の灰色・うす青・茶褐色の時折り紫ふかい日翳を浸した，粗い手ざわりの親しさ。それら種々雑多な丸太が土場一面に集積され，そのそばを通ると湿りをもった木木の香が，春まだ浅い太陽の光のなかに立ち昇ってくる。沢にはいると南に面した雑木は，フッフッとすでに芽ぶいて橇道の上に枝をさしのべている。その枝を腰を屈めつつくぐるとハラハラと手や顔をうつ。冬の粗硬な感触はうすらぎ，しなやかな感じだ。日陰の木はまだ冬の眠りからさめきれずにいる。わずか5〜6 m の渓をはさんで日向と日陰の斜面では，樹木には驚くほどの表情のちがいがある。

渓川のほとりのウリハダカエデの根かたにうす紅のイワカガミがしおらしく咲いていた。まだ雪がつい二〜三日前に消えたばかりである。私は橇道をのぼって行く，爪先きあがりの坂の路面には10 cm 位の小丸太が40〜50 cm おきにずぅっと並べられた木馬道，日陰にはところどころ疎(まばら)に雪が残っている。ロート草が雪を抽(ぬ)いて紫がかった朱の太い茎を出していた。ふと直径80 cm 以上もあろうか太いシオジの樹の根方に黒い服装の青年がうずくまっている。「どうした」と声をかけても返事もなく顔も向けない。余程疲れているらしく近寄ってみると手脚はひどい凍傷である。「歩けるか」と聞くと軽く首肯く。私は彼を抱きかかえる様にして下りはじめた。やっとのことで渓を渡りトロみちまできてトロに乗せ入川の丸共の事務所まできた。山本徳一さんに事情を話し凍傷の手当をお願いした。彼は早速医療箱から薬や繃帯を取り出して応急手当をし，奥さんの作ってくれた重湯をのむ。徳一さんは秩父山岳会の役員でもあり，遭難者として連絡をとり病院へ送ってくれた。この遭難者は四日前に甲武信岳でこの大雪に会い，食糧もつき空腹と寒さで沢を下ってきたと云う。奥秩父の谷は深く厳しい沢歩きは，余程山を熟知経験した人以外は最も危険なコースである。しかし谷が深ければ深い程光線の流れは明るく，大切なものに感じられる。杏の花咲く頃を除いてはいつも霧にとざされ暗い感じがする。そんな山峡の里では，赤児が生まれると額に墨で「犬」と書いて，襤褸につつみ老婆が部落のはずれのセッチン詣りをする。セッチン詣りとは，崖造りの家で屋外にある共同便所にお詣りする。奇習のことだと，いつか六本松の山本のお婆さんが話してくれた。山峡に住む者の暗い自然と人間の生活が想像される話で

ある。

山の家は寒さ早けれ母の家ゆ
　一人し帰るさみしさ泌るも

寒き国ゆ我の来たれば日和つづく
　ふるさとの家はあたたかかりし

〔蚕豆の眉〕より

奥秩父は深山幽谷ゆえか小鳥の啼声もさえている。それが切り立った岩山の天然林に谺して，悲哀さえ感じる哭き声にきこえてくる。中西悟堂氏の「雨の雲取」1952年の6月の旅で「山と鳥」に収められている。「雲取り登山に意を決して出かける。アオゲラ・ホトトギス・コルリ・ウグイス・シジュウカラ・センダイムシクイの声を間近にきき，地蔵峠ではヤマガラの声に耳をかたむける。霧藻峰でメボソ・御経平でジュウイチ・ホトトギス・エゾムシクイの“ヒーチーキー”のさえずりをきく。白岩小屋あたりからはミソサザイ・ルリビタキのさえずり，そしてやがてウソの声，このあたりでは珍しい植物にも目をむける。芋の木ドッケを過ぎて大ダワへ下るあたりでは，小鳥は完全な亜高山鳥で，メボソの“ジュジュリ，ジュジュリ”。エゾムシクイの“ヒーチーキー”。ルリビタキの“チュリチリロ”。ヒガラの“チピチン，チピチン”の合唱に新たにコマドリの“ヒンカラカラカラ”を加えた。そしてキバシリも加わってくる。またゴジュウカラの“フィーフィー”という声もきいた。……」と記されている。豊かな小鳥たちの住む山峡で，動物実習の折り日塔正俊先生と二人で山歩きしたとき，鳥の啼き声をききつつ鳥の名前を教わったことを思い出す。また妻が所属していた郷土の短歌誌「山羊歯」の主宰者斉藤広一氏もアララギの歌人で，歌集「山肌」に栃本部落を詠んだ数首がある。

ダムの水ここの狭間に入り来たり
　青く湛ふる若葉の蔭に

板縁に坐りてゐたり朝の日に
　露乾きゆく屋根の置石

家裏の狭き畠にこんにゃくの
　嫩葉(わかば)ひらきて露したたらす

麦刈りし丘に照る日もわびしみて
逝きにし友のしきり思ほゆ

また毎年夏になると，植物実習で学生の野外採集で雁坂峠に出かける。朝早く出発し滝川林道から旧山道へ登ってゆく。入川谷と滝川谷の分水嶺をなす胸突き八丁の坂を登るのはひと苦労である。水の元・雁道場あたりで小休止，ウラジロモミ，コメツガなどの亜高山帯の下部の天然林に入ってゆく。タケカンバ，カラマツなどが迎えてくれる突出峠までくると，道もゆるい坂道となり，その平らな所で大休止となる。海抜 1600 m 辺りまで登ってきた。ミネザクラ・ミネカエデ・オガラバナ・ヒロハツリバナ・ネコシデなどの亜高山帯性の樹種が普通となる。何時であったか女性の作業員数人を連れてバラモミの球果採取えきた時の事であった。一頭の大きな熊が縦の大木に登っているのを先頭の人が見付け，「熊だ」と知らす。皆んな立ち止り早速私は前に進み確かめた。仔牛程度の熊が夢中でアケビの実か何かを喰べていて，われわれには気づいていない様子。そこで「いちにさん」の音頭で鉄砲の音をたてる「バァン，バァン，バァン」と一勢に大声をあげた。こんどは熊のほうが慌てて樹からおりると一目散に逃げ去った。皆んなも一安心で笑声となった。そんな話を倉田悟先生と話しながら登ってゆく。アオトド・シラベ・ハイマツ・シラカバ等の亜寒帯の林となってくる。やがて雁坂峠につく。高山植物の綺麗に咲いた草原のさわやかな風が汗の肌をいたわってくれる。帰りは自由解散で足速い学生は一時間足らずで駈け下りてゆく。倉田先生はなかなかの文筆家である。「日本産樹木分布図集」抜刷 3 冊をいただいたが，その中の秩父演習林に関りあるものを抜き書きしてみよう

「東大秩父演習林の栃本作業所に勤務されている原田さんには，森林植物教室の面々が現地調査で入れ替り立ち替りご助力を願っているが，私の頭の中ではうかつにも原田さんの顔と名前が一つになっていなかった。その原田さんと作夏 8 月 20 日前後に数日間，奥秩父の山と谷を歩き巡った。雨の一日，少し小降りになったと思ったので，10 時頃から大除沢へいくことにした。……目的とした胸中にあったオオヤマレンゲとウメウツギはいずれも出現しなかったが，原田さんが栃本の先の川又の生まれと知り，植物名方言も聞き書きした。……」この原田正雄君は私が豆焼沢の林道測量をしたときに手伝ってくれ，当時中学校を卒業したばかりであった。滑沢樹木園の頂上の平坦な胡桃の林に囲まれて滑沢の造林小屋があった。ここで演習林の官行製炭をしておられた原田初五郎さんの長男で，一家はご夫婦と子供 2 人の 4 人暮らしで，弟の秀雄君はまだ小学生だった。私はここへ泊めてもらい毎日正雄君他(ほか)数名と豆焼沢まで林道設計の測量に通った。その後菌茸類の採取にこられた植物教室の青島清雄さん，秩父勤務の前田禎三さんの 3 人で厄介になり，孫四郎峠，雁坂峠へ菌茸類の珍品を捜したことがある。丁度青島さんが婚約時代とかで，夜は早めにランプを消し，差し込む月の明かりの中でオノロケを前田さんときかされた。当時は食糧持参で，麦，甘藷，馬鈴薯など代用主食をリュック一杯背負いお願いしたものだった。

物質的には貧困な生活ではあったが敗戦で，開放され自由を満喫した夢の多い頃でもあった。先生の文はつづく，「奥秩父の川又付近の渓岸にはホソエカエデの老木が多く，川面に果穂を垂れている。あのびっしり垂れた果穂をみつけて，思わず手を拍った学生時代が懐かしい。渓風に淡紅の葉柄をふるわせ，淡泊の葉裏をひるがえし果穂はゆらりと垂れている。

ホソエカエデの果穂を透して入川の
　水はきららに右走り行く」

ここまで書いてきて，ふと亡くなった妻のことを思い出して，詩の先生であった詩人金井直氏の詩「水の樹」の一節をくちずさんだ。

「水の樹」

立上る水　1本の樹
　絶えまない　上昇と　落下の樹
水の梢の言の葉の古いそよぎ
無意識の樹の深みの水　幻の樹の面影の
　遙かなる国の夢みる鳥の
巣を抱く樹の思考の形態
果てしない，雛の響きの形に繁る水の秋
　来し方　行末の羽搏きをとどめる樹
樹液に浸る「時」の脚に
　摑まれている枝の塒に
旅人はふたたび帰る。水の樹に喉を潤す
　水の輪廻の落葉を浴る。

〔詩集「id」〕より

2.　身を刺す寒風

いつものことだけど，肌に秋の終りの冷気がしみる頃になると，そのたびに，ああまたあの冬がくるのだなあと思う。それは私に一生つきまとう，奥秩父の冬の冷たさと，寒さである。1947年新婚早々の私は，毎日滝川林道延長工事の責任者として，先に測量した豆焼沢まで通った。昔一人の旅人が道に迷いこの豆焼沢まで辿りつき，焼いた豆三粒だけの食べ物となり，それを大事に大事に嘗めるようにしながら麓の民家にたどりつき助かったという古老の説が豆焼沢の名称と

なったという。その豆焼沢19林班が今施業期の伐採予定地となり，秩父木材会社の手で伐採が始まり，材の搬出に早急な延長工事に迫られた。会社の全面的な協力との触込みであったが，食糧難で人夫はなく工事は遅々として進まない。当時は機械力などはなく総てが人力作業で，硬い岩を掘鑿するにも鑿(のみ)とハンマーと金挺子位い，1mの深さの発破孔を穿つのに1日がかり，切り立った岩盤に幅員2mの路面巾をとるには，何千立方米の硬岩を破砕しなければならない。4〜5人の人手では仕事に呑まれて溜息だけである。半年かかってやっと数100mの状況に，住田林長は肝をいらだて大晦日の現場で吹革(ふいご)の炭火をおこしながら燠(おき)にあたり「正月返上」と激怒した。豆焼沢を吹きおろす渓風は粉雪を舞いたて，かぶさる様に穿れた岩壁には長い長い氷柱(つらら)が白銀の肌を光らせている。凍える手をさすり，震える脚を足踏みしながら私は途方にくれた。初めて迎える私達の正月も駄目かと，深い歎息に解決の思案などあるはずもない。そんな苦労の末翌春秩父木材が西武鉄道KKの系列下になり本格的な肩入れで完成した。しかし妻は産後の病で入院していた。西武系列となった秩父木材は，大型集材機やガソリン機関車など導入した内木林業部が入山してきて，大大的な機械化事業を開始した。そのため19・18林班の立木調査が急がれて，内木林業部の小屋を借り泊り込みで始まった。秩父から調査係長の角川さん自からこられ総動員での調査，やはり冬の寒い時期だった。疲労と寒さで体調をくずされた角川さんは，あとを私に任されて秩父へ帰えられてから間なく亡くなられた。豆焼沢の冷たい風が災いしたのであろう。お葬式に参列し，人の命の儚さをしみじみと味った。人は誰れでも死という宿命を負わされていて，そこから逃げ出すことは出来ない無情さをもつ。土の上に一握りの米が撒れ墓の中で骨壺は永遠の眠りについた。その後赤沢谷も25・26林班と開発が進行してゆく。1948年の夏，赤沢林道の設計を土木実習を兼ねて実施することになる。入川の合流点の杣小屋に泊まり，加藤誠平先生，丸山正和教官それに山口伊佐夫さん達のクラス9名と一緒にランプの生活が始まった。風呂はドラム鑵の野外風呂，晴れた日は庭での食事，野趣たっぷりの生活が案外うけて，予測，実測とも順調に進む。夏の真盛りだがここは涼しい別天地である。熊笹を靡かせて吹いてくる風はなんともいえない清々しさを感じる。白手岩沢の合流点に丸太流送の鉄砲堰が組まれ，満々と水が貯えられ，元気盛りの学生さん達は昼の休憩時間を飛び込み水泳をして楽しむ，愉快な実習であった。予定の1週間で引揚げ，あとは私にまかされた。その時加藤先生から，赤沢林道と既設の入川林道終点とは相当な落差があって，その連結方法をどうするかということであった。以前藤林誠先生から米国の林業雑誌を見せて戴いたときに，珍しい運材方法の写真がのっていたので，藤林先生にお聞きしたら，「吊じゅら」と翻訳したがいいといわれた。張り渡された鋼索に直径1mもあろうか大きな鋼管が吊られ，その中を丸太が滑り落ちてゆく写真である。面白い仕掛けだと思い加藤先生にお話しすると「瓢箪から駒」の譬それでいってみようということになり，鋼管の代替を考えることになった。丁度全林道のレールを9k軌条に交換し，いままでの6k軌条を撤収し，その処置に困っていたときであったのでこれを利用できないかと工夫し，吊じゅら

を鍋底型にして軌条を利用することを思いつき，その索張り，そのほか理論計算のため加藤先生の鎌倉のお宅に10日間程泊り，抛物線索の理論公式の教授をうけた。また修士論文のため来栃された大学院生の上飯坂実さんからは苫名先生の垂曲線索理論の手解きをおそわり，索長，垂下量，索勾配，最大張力等の大方の数値を得て既往の木材の摩擦計数や森林利用学教室の山脇三平氏の測定値を用いて滑走速度を試算してみたが，係数値にひらきがあり実際に現場で実物を使ってしらべることにした。赤沢小屋に泊まり板じゅらの滑走実験をし，その実験値から摩擦係数の標準値を決め，現場の地形などから板じゅら区間の短縮と速度減速，走行転換のためスイッチバックを設けて，吊じゅらに滑り込む速度を0に近い数値になるように設計をした。設計に基づき現場に杭打測量をし，板じゅら区間，スイッチバック，吊じゅらの上下錨碇の位置，臼場等を決め，錨碇のコンクリート打ち，板じゅら，スイッチバックの土工作業から始めた。鋼索はϕ24 mm，ϕ29 mmの2本を現場に運び，吊り軌条の工作は，秩父市の引間鉄工所に原寸の模型を持ち込み工作した。段取りよく進行する。愈々吊じゅら張りである。上部錨碇のワイヤー固碇桿の位置まで左右2本計4本120 mの鋼索を引揚げる。ウインチ等はなくヨイトマケの轆轤に長い挺子棒をつけ4人掛りで，鋼索の先端をクリップで留めた曳索を巻取ると少しづつ這いずるように上部錨碇に近づいてゆく。全部巻き揚るのに数日かかった。夫々を固定環に通しクリップ5ヶづつかけて固定した。索長104.37 mの鋼索はゆるやかな抛物線を空に描き赤沢の流れを跨いで張りあげられた。板じゅら区間の土工も終わり所定の構造の框も組まれスイッチバックは転落する材が逸脱しないように渓側を石垣で固め，高さ2 mの防護柵を建てる。吊じゅらの構造は2 m 70 の6 k軌条を内側にして稍々半円形に曲させ，その両端を水平近く曲折してUボルトの挿入溝を刻んだ。軌底は，しゅら板をとめるボルトの穴が9ヶ穿ってある。この鍋底型の吊軌条を，水平部分を鋼索にかけUボルトで締め付け固定する。間隔1 mで88本吊り下げた。晩秋の赤沢の谷を吹き下す風は身を刺すように冷たい。ボルトを締める手はかじかむ。座金がUボルトになかなかはまらない，躰は鋼索にかけたロープで宙吊りの恰好，手でもすべらせれば下の滝壺にジャボンである。そんな曲芸をしながら，蔦職の岡田磯次君と二人で吊軌条を吊ってゆく。大岩の底を流れていた渓流は，昨夜の大雨で滝となって流れ落ちる。吊られた軌条を踏みながら渡ってゆく，下は激流の阿修羅場だ。だが雨の朝は暖かくすべらぬよう注意しながら軌条吊りをはじめる。とうとう最後まで二人で吊り終えた。夜ふと宮沢賢治の銀河鉄道の「春の修羅」の詩を思いうかべた。

心象のはいいろはがねから
　あけびのつるはくもにからまり
のばらのやぶや腐植の湿地
　いちめんのいちめん諂曲(てんごく)模様

⋮

あれはひとりの修羅場なのだ
　日輪青くかげろへば
修羅は樹林に交響し
　陥(おちい)りくらむ天の椀から
雲の魯木の群落が延び
　その枝はかなしくしげり
すべて二重の風景を　喪神(そうしん)の森の梢から
　ひらめいてとびたつからす

雨ニモマケズ風ニモマケズ
　雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ
丈夫ナカラダヲモチ　欲ハナク　決シテ
　瞋(イカ)ラズ　イツモシヅカニワラッテヰル

ただ黙々と吊ってゆく，こんな危険な作業は平常心が大切である。怒ったり，苛立ってはいけない，大自然の樹林や渓川と風の音との調べに合せ動くのだ。それは夢の銀河鉄道につながる吊りじゅらだから，河畔の木炭倉庫の一室でそんな夢をみた。栂材のしゅら板を下部から順次ボルトを締めてゆく。出来上がった吊じゅらの容姿は，夢でみたあの曲線美，赤沢谷の奇岩の上を舞ひ渡る天女の橋である。世界にただ一つしかない吊じゅらなのだ。私は胸に熱いものが込上げてくる。そしてうまく滑るかなと一抹の不安を抱いた。1949年の師走，藤林先生，加藤先生それに利用教室の方方を迎え吊じゅらの滑走実験を行なった。イヌブナ・シオジ・モミ・ツガ等の素材丸太が赤沢の軌道をトロで運ばれ，次から次と滑降してくる。上部板じゅらをスイッチバックして，穏やかに吊じゅらに乗りこんで，だんだんと速度をあげカタカタとしゅら板を鳴し臼場へ跳びこみ，下の土場へ転げこむ。その間30〜40秒，1本1本滑りおりるたび歓声があがる。実験も恙なく終り，なかには伐りたての生栂など猛スピードで錨碇を飛び越えたものもあり，制動装置の必要と，ボルトのナットがはづれしゅら板が2枚ほどはずれたりした。これらの点を今後の課題として師走の陽の昏れないうちに引揚げ宿舎に帰った。その後上部板じゅら区間の崩壊や，無茶なとばしでしゅら板を破損させたりなどのことがあり，一時使用を中止した。会社では出材計画に狂いが起きると，自前の架線運材をする様になり，私が千演へ転勤したあと撤去されてしまった。ついに銀河鉄道の夢は潰れ，その影も姿もなくなった。ただ赤沢谷の流れと岩だけが昔のままに，吊じゅらの夢を追いつづけているようであった。宮沢賢治の「政治家」という詩を私は口遊む。

あっちもこっちも　ひとさわぎおこして
　いっぱい呑みたいやつらばかりだ
羊歯の葉の雲
　世界はそんなにつめたく暗い
けれども　まもなく　そういふやつらは
　ひとりで腐って　ひとりで
雨に流される
　あとはしんしんとした青い羊歯ばかり
そしてそれが人間の石炭紀であったと
　どこかの透明な
地質学者が記録するであろう」

その記録のあとかたさえ消えうせた。

3. 職人気質

入川部落は丸共さんが入山してきてから出来た集落で，川又部落もまたその当時落合発電所建設で水の取入れ堰が入川と滝川の合流点に出来て，物資輸送の馬トロ道が水路に沿うように軌条が敷設されてから人が住む様になった。私が川又に新世帯をもった頃は，9軒の部落で，殆どが他県人で地元の人は1軒のみであった。栃本作業所の下の旧道をだらだらと下ってゆくと，そのトロ道に出会う。少しゆくとこの道に沿って渓側に崖作りの家々が並ぶ。端が建具職の木村源次さん，次は栃本の山中家から分家した山中栄七さん，酒，煙草その他配給物品などを取扱っていた。次が新井定吉さんで，木炭等の仲買いの指定業者で，トロ道は大きく外カーブして，演習林の学生寮の用地にはいる。急斜面には旧見木林の外国樹種が三々五々と残っている。その間の空地を加藤のお婆さんが甘藷を作っていた。学生寮は倉庫も兼ねていて，その下に崖け造りの床下を物置にした私の官舎がある。下の渓沿の水の取水口の堰堤には番人の黒沢さん一家が住んでいた。寮の隣に通称ヘッチョオさんの家がある。樵夫で還暦をとおに過ぎ木挽もする。口喧(やかま)しい婆さんと，近辺では垢ぬけした美人のオリキちゃんという娘さんと3人暮らしである。ヘッチョオというのは仇名で，屁をひりながら一丁も歩くというところからつけられた呼び名で，本人も平気で返事する。次が演習林にきている古川隆司君の家。次が市川徳次郎さんで出(だし)の職人，最後が薬草商人の河辺禎蔵さんの9軒である。いずれも狭いトロ道に沿い，すぐ前は切り立った杉の植林地。裏は荒川の崖で床(ゆか)が道と同じ高さになる様に崖岩に柱を立て，床板を張り奥行がせいぜい2間位の崖造りである。川向こうはそそり立った岩肌に灌木がへばりつく様に生え秋には美しく紅葉する。日照はこの渓間に沿うて夏間は長いが，冬は太陽が渓間を横切る形になるので，精々

2時間くらいでほとんどがお日様を拝むことはない。飲料用水は小沢から筧で家に引込み水瓶に流れ放しである。真冬でも温く凍ることはない。夏は冷たく冷し物はここえつけてある。ここの住人はそれぞれが特技をもつ職人気質まる出しの生活で，部落の寄り会でもなかなか意見がまとまらないと区長の山中栄七さんがこぼしていた。当時の寄り会は，多くが配給物や代用食糧の分配で物資不足の時代なかなかまとめるのには容易でない。とにかく飯場をいくつも渡り歩き流れ流れて来た末この山奥暮らし，何処へ飛んでゆこうと食ってゆける腕がある自負心と身軽さが，「他人の厄介になるのが大嫌い」「義理と人情と，痩せ我慢」の職人気質を作りあげたのであろう。それぞれ一癖も二癖もあり，はたから見ているとユーモラスにさえ見えるが，どうしてどうして本人達には気真面目であったりする。木村源次さんは建具の職人さんで，人と話しすることのあまりない温和な人柄で，奥さんの訛から八王子の在の人かもしれない，息子さんの作次さんは絵が上手で，秩父の織屋で絵師の修行中とか，丁度丸共さんで欅の半パ板を分けてもらったので，戸棚の鏡板にして茶簞笥を作ろうとお願いしたら二つ返事で引き受けてくれた。早速仕事にとりかかってもらえるものと思っていたら，一月程過ぎた或る晩訪ねてきて，「まあお上りなさいよ」と部屋に招くと，草履をぬいで這ふ様に畳へあがってきた。そういえば多くの家が畳などなく，板間に薄縁(うすべり)である。しばらくお茶でも飲みながら世間話もとぎれた頃，源さんは「あのう図面ひいてきたんだがのう」と懐(ふところ)から出して見せてくれた。茶簞笥の正面図である。私は一寸驚いたが「結構です」と返事した。職人冥利のような顔をされ帰っていかれた。それから小半年もたったであろうか，妻が入院して，独り暮らしとなったとき頑丈な茶簞笥ができてきた。その後秩父，千葉と転居する先きざきにこの茶簞笥は歪みもせず私の家族の一員のごとく茶の間に座っている。ヘッチョオさんの婆さんは草履や草鞋作りの玄人(くろうと)で，一口にわらじ，といってもいろいろあるらしい。ここは信州，甲州の通り道で昔から旅人(たびにん)の抜け道として，国定忠次もここを通って逃げたと話す。昔の話だが，さむらいの穿く武者草鞋，山伏・修験者の穿く八乳(やつちち)草鞋など作り方が違う。同じようにできた草鞋でも，お百姓と土方や山師の穿き方が違い，川で鮎釣りや，網打ちする釣人の穿く草鞋には藁と一緒にボロ布をさいて編みこんであり，丈夫一式の代物(しろもの)だと婆さんは語る。「草鞋掛けという専用の足袋を履くのを知らないで，普通のおか足袋を履いて，ギリギリしばるから，草鞋の緒が足に喰いこみヒドイ草鞋喰(くい)になる。草鞋の穿き方ひとつで旅籠(はたごや)の態度(ようたい)も違ってくる。草鞋を脱いだ旅籠での待遇もきまるというもんだよ」と婆さんは囲炉裏の灰の中から焼芋を出して私に差し出す。この婆さんの草鞋で川遊びに行ったが，苔の生えた岩場でも滑ることなく快的だったが獲物はさっぱりだった。市川徳次郎さんのおかみさんには本当にお世話になった。妻が病み母乳は出なくなり，乳呑み子をかかえ私は進退極まった。当時粉ミルクや牛乳もない。私の作る重湯を呑ませても，ただ泣くだけ，そのうちに泣声も細り，黒い固い小粒の便をする。まさに飢餓寸前である。ヘッチョオの婆さんがきて，「徳さんの嫁御(よめじい)にわしが相談してくる。二月前に3人目の女子(おなご)を産んだばかりだから乳があまっとるだろう」と呼びにいった。早速赤ん

坊を抱いてやってきて，息子の均を抱き乳首を口にやると，噛みつくようにドクッ，ドクッと呑みはじめた。「男の子は女の子と違い吸い方が烈しいや」といいつつ腹一杯のませてくれ，それから毎日授乳にきてくれた。入川の弟の所に山羊乳があるからと，山羊乳を持ってきてくれ，夜は温めてのませた。お陰で均はだんだん元気になり，妻も臥せた床で眼をうるませていた。粗末な身形（みなり）でも心の優しい女（ひと）で，妻を力づけては乳くれる姿が神々しくさえ見え，人の情の有難さをしみじみと知った。徳次郎さんは，矢遠（やえん）の名主で滑車に独自のブレーキをつけ炭材をとばしていた。秩父木材会社がディーゼル機関車輸送になってから赤沢～二瀬間の運材責任者として，大勢の運材夫の指揮をしていた。お隣の河辺禎蔵さんは，禎ちゃんと呼ばれた気さくな人で上州上野の出身である。薬草の仲買いをしている相場師で，当時上州・秩父の山村では蒟蒻大尽（こんにゃくだいじん）とか，ロート根大尽という流行語があった。いわゆる闇屋が統制の網をくぐり蒟蒻やロート根を売り捌きすごく儲けた人達のことである。このロート根はハシリドコロの根茎を干したもので茄子科の多年草で山間の湿地に自生している。とくに奥秩父のシオジの林床に密生し茎は高さ 30～60 cm，根茎は結節状で葉は互生し，長楕円形で全縁・質は柔らかい。4 月頃黄紫色の鐘状の愛らしい花が開く。果実は丸く，根茎は有毒なアルカロイドを含むので昔から毒草で知られている。根茎を干したものをロート根（莨菪根）といい硫酸アトロピン製造の原料とする。鎮痛・鎮痙（けい）・副交感神経麻痺剤のロートエキス・ロートチンキを製造し胃痛などに用いられている。硫酸アトロピンは目薬などにも用いる。このロート根を入川・川又・栃本の女や子供らに kg いくらで採取させ，河原で干し乾燥させ麻袋につめ馬トロで運び出す。一冬で数 100 kg から数 1000 kg の時もあった。採取地は演習林管内だけでなく民地や国有林に及び取り締りもなかなかで，当時の誤った民主主義が国のものは人民のものといわんばかりの時代で，悠々と儲けばなしで札束をよく勘定していた。もともとはトントン葺の職人で木地屋もしていたという，気心のいい親切者で困った者の面倒もよくみていた。演習林も事業拡大で人手の欲しいときで，若い熟練者が欲しいと話をしたら，郷里に若い衆がいるので話しかけてみましょうと紹介されたのが，飯出七郎氏と今井淳氏のお二人であった。山作業のベテランなお二人をえてどれだけ助けて戴いたことか，北演から 9 k 軌条がきて，入川，滝川の両軌道の 6 k 軌条と取替え重量輸送に耐えるため敷設しなおしをする最中であった。その後，世の中もだんだんと落ち付きボロい儲けもなくなり，いつの日か禎ちゃんはいなくなり空屋となった。中学をでたばかりの古川隆司君の家は兄弟が多く，長男の彼は大変だった。父親は一寸したインテリくさく，日遅れの新聞を隅から隅まで詠むのを日課にしていた。人に使われるのが大嫌いで，台所の大変さを見兼ねて，出勤時間に束縛されない保線の仕事をお願いすることにしたら，引受け朝早くから夕方おそくまで真面目に精出してくれ，おかみさんも大変よろこんでいた。入川部落にトオフヤというよび名の家があった。もの日の時だけ注文で豆腐を作る市川泰市さんのおかみさんの内職である。泰市さんは徳次郎さん兄弟の長男で猟師で，夏は山仕事をしている。鉄砲撃ちの名人で，今迄熊，鹿，猪，羚羊（かもしか）などの大物を数えき

れぬ程獲(と)ったという。兎，鼯鼠(むささび)，鼬(いたち)，貂(てん)などの夜行性の獣を月の明かりで射止める。私も子供の襟巻に鼯鼠の皮を分けてもらった。羚羊の皮は尻皮の一級品で，利用教室の方方に頼まれ数枚譲って貰った事がある。泰市さんは，軌条のジンクロかけの名技をもつ。ヘアピンカーブでも，分岐線の曲線でも測点に合わせ美事なカーブを描く軌条を敷いてくれる。「鉄砲うちは，鉄砲の癖をしらなきゃ駄目で，鉄砲の癖とはどんな弾道でとぶかを知ることだよ」といっていた。その勘のよさは話の通りで，滝川・入川・赤沢の各軌道の軌条敷設を総て彼の腕で敷いてもらった。赤沢の伐採現場の監督兼飯場の親方田口喜太郎さんも入川部落の住人で，両神時代からの丸共さんの子飼いの伐採職人で酒も強い。「酒が呑めて，博打が打(ぶ)て，女郎買いの付合いのできねえような奴はろくな仕事師にやなれねえ」などど凄い発破をかけ，若い者をおだてていた。つまり，三道楽の付合いの出来る位稼ぎ出せということらしい。それでいて「義理と褌(ふんどし)がはずせるかい」という律儀(りちぎ)な一面もある職人気質の人だった。60才をとおに過ぎたであろうに，自から陣頭指揮をとり，ツルで丸太を転がすのに丸太の動く力を利用して骨折らず土場に綺麗に並べるなどの技には感心する。赤沢の鉄砲堰も彼の築造で，その巧妙さは驚くばかりだ。永い経験と手練が頭ではなく手が先に働くのだと図体の大きい仁王様のような掌を見せていう「わっしらは，頭じゃねえ腕が資本じゃがなあ」と。滝川林道に沿って高さ5〜60mの上を旧道が通っている。田村仲次郎さんの一家は，その道沿に住んでいる。彼も山師で伐採，出しなど山仕事ならなんでもやり，仲ちゃんの呼び名で親しまれている。岩茸，山女(やまめ)，岩魚(いわな)とりの名人で，身が軽く絶壁の岩場でもヒョイヒョイと渡り歩き岩茸を採取する。渓川で彼の箱眼鏡で覗かれた山女や岩魚はうごけなくなり，そこを銛で魚を痛めないように一刺する手練は妙技である。来客のときいつもお願いして，これらの品を料理し，接待の膳を賑やかにしてくれた。その他入川部落に洋傘(こうもり)の修繕，キセルの棹替え，鋳掛けもするなんでも屋の新井定吉さん，赤沢の森下園吉さん，官行製炭夫で一風変わったタイプの木村新吉さんなど，夫々腕自慢の職人気質の人達ばかりだった。これら大方の方方は今は故人となられて，静かに奥秩父の土となっておられる。この人達と一緒に山峡の大気を毎日吸い，潤泉の水を飲み語り合ったことが，ジーンと胸にくる。演習林は教育，研究の場ではあるが，そこには人が住み，生活をし，子弟を育ててきた，それらの人達の歴史を作る場でもある。そしてこれらの人達の労働により演習林の事業が推進されてきたことも事実である。そこに人間同志の情が湧き，総ての生命が育ってゆくわけで，それが文学であり，詩情であると思う。秩父演習林が今後とも豊かな自然とともに，山峡に住む人達とともに詩情溢れる職場であることを願ってやまない。

3年ほど前だったか，何十年振りかで東京の友人を案内して，在職中にお世話になった山中国辰氏の経営する民宿「西川荘」に泊まり，おいしい手打蕎麦など御馳走になった。翌日息子さんの運転で国道140号の豆焼沢までゆき，峠のような高台に登り眺めると，滝川の軌道も，豆焼沢の木橋も姿を消し一変していた。しかし遠い山なみの山々はいささかの変りもない。私もそろそ

ろ人生の峠にさしかかてきた。しみじみと奥秩父で過ごした10余年を懐かしく振り替えりみて，やっぱり演習林はいい処だったと，今日の秋晴の空のようだと友人に話をした。

密林の冷気は邪心を竦ませる
　太古の息の風にさらされ

〔白夜の翳〕より

III. 冬ぬくく

1. 記憶のかげり

乗り換えた私達の汽車は，喘ぎ喘ぎ黒煙を吐きながら上総丘陵の合間を走りつづける。深い小櫃川の渓谷に沿いながら，今朝早く秩父のお花畑駅を出てから熊谷，上野，秋葉原，千葉，木更津と5回も汽車を乗り換えたことが，何か遠い遠い帰ることのできない異国に来た思いがするのだろうか。いままで元気に窓から顔を出して，「海だ，海だ」と東京湾の寂(さび)れた漁師(りょうし)まちの向こうに見える白波を喜んでいた息子の均もしゅんとなり，妻の胸に凭れかかっている。「顔いろが冴えないが，気分でも悪いのかい」と私は妻に声をかけた。「なんでもないよ」と弱弱しげな声の返事がかえってきた。それもそのはずである，生まれ育って30数年間秩父の地を離れたこともなく，一緒に暮らしてきた母一人を残して，知らない土地で暮らそうというのだから，ひとり娘の妻としては切ない思いであろう。今朝別れのときお袋さんを元気づけていた言葉も，現実ここまでくると空虚な絵空事としか思えなくなり虚脱されてゆくのであろう。妻は，かかりつけの医者にしつこいまでに転地療養をすすめられていた。秩父盆地はセメント工場から吐き出す灰燼で大気は汚れ，それに夏は暑く，冬のきびしい寒さは，病弱な妻には生命にかかわる問題なのである。夕方になると決まって微熱が出る，癒ってゆくどころか，じわじわと蝕まれてゆく病体に，私はたまらない不安と焦燥を感じるのだった。やっとの事でお袋さんと妻を納得させ，扇田教授にお話して温暖な千葉演習林へ転勤できるようになった。しかしお袋さんの心情を察するとき，これでいいのかと辛い苦労をかけるのではないかと心が責められる。「もうすぐ亀山に着くよ」とわざと元気な声を出して自らを励まし，網棚の荷物を却しはじめた。久留里線の終着駅亀山のホームに列車は汽笛を鳴らしながらはいってゆく，田舎の小さな駅で，ホームに立つと二〜三人の青年が走り寄り，「成瀬さんですか」と聞くなり私達の手荷物をとり，どんどんと改札口へ向かってゆく，私達親子もそのあとにつづく，駅前には十数人の人達が迎えにきていた。昨日秩父で引っ越し荷物を積んだトラックの運転手の山本幸一さんと助手できた佐々木卓二さんのお二人の顔も見える。今朝暗いうちに秩父を出られお昼過ぎにつき荷物は家に片付けてありますよといわれた。以前から交際していた札郷作業所主任の糟谷由助さんが「御苦労様でした」と皆さんを紹介され，私も妻と均を紹介し「どうかよろしく」といえば，妻も小さな声で「よろしくお願いします」と

頭を下げた。糟谷さんの心くばりで，今夜と明日の食事は近くの食堂朝日屋で仕出してくれる様になっているとの事で，荷物をといて食事の準備をすることもなく妻もひと安心したようだった。その夜山本さんと佐々木さんと一緒に教(おそ)わった亀山鉱泉にひと風呂浴びに出かけた。泥くさい濁った鉱泉に一寸驚いたが，はいってみるといい気分で，疲れがほどけていった。翌日お二人は秩父へ帰られ，私達一家はここ藤林の仮あげ官舎の住人となる。この官舎はもともと木炭倉庫で，戦時中軍の要請で演習林も軍需用品として木炭生産に励み，亀山駅から貸車で積み出すため，民地を借地し建てた木造トタン葺平屋建の40坪位を，戦後半分を郷台作業所主任官舎として改造したものである。天井・雨戸・床の間・押し入れ・便所・風呂場等一通りあり，障子・襖などの建具もはいってはいるが，永い間空屋であった為か建て付けが悪くなり歪んで隙間だらけである。それでも八帖・六帖2間と台所がつき，秩父の7坪の家よりも広々として，均は大よろこびで駆け回る。私達が荷物を片付けていると，昨日やっと堀り上げたという，井戸の水の溜まり具合を近所の井戸堀り職人の島津忠次氏が見にきた。当分は縄に吊るしたバケツで汲み揚げるしかないが，ひ弱な妻にはとても無理なことで，島津氏に手押しポンプとドラム罐とビニールホースをお願いし，井戸端にドラム罐を据えホースで厨まで水を引いた。毎朝ドラム罐一杯に水を汲み上げてから郷台作業所へ出勤するのが日課となる。澄んだ大気と暖かい気温とおだやかなまわりの風景，田舎の人達の親切さに恵まれて，妻の病気もいくらかずつ恢復に向かい，二週に一度の久留里病院の医師もそんな診断であり，私達にとって言い知れぬ喜びであった。坂畑小学校二年の均も近所の友達と元気で通学をする。郷台作業所まで約7km程あり自転車で通う，地元の部落からも幾人か自転車で通うので，猪の川林道をおしゃべりしながらペダルをこぐ，大雨のあとや霜どけの日には，路面がドロドロになり，タイヤにその泥がねばりつき倍にも膨らみ動かなくなる。竹棒でこそぎ，こそぎしながら押して帰る。そんな苦労をしながらも郷台畑への坂道をあがると，広々とした台地の苗畑に，スギやヒノキの若い苗木がスクスクと緑の葉に太陽の光を浴びて育つのを見ると心は安らぎ，胸一杯新鮮な大気を吸い込む。再び倉田悟先生の文章をおかりする。「昨春他界された日本シダの会会長の行方沼東氏とは，何度房総の清澄山から三石山附近のシダを求めて一緒に歩き回ったことか，昭和26年8月上旬に三石山頂の三石観音に泊まって，桑ノ木沢～黒滝～郷台といったシダ採集の黄金コースを巡ったが，おそらく最初だった。昭和30年前後は毎秋，房総の奥の院ともいうべき郷台作業所に陣取り，遠くは京都，愛知，静岡，神奈川などのシダ党を迎えて，その豊富なシダ植物を案内した。そんなに何度も来て採るのがあるのかと，演習林長に皮肉られたりしたが，種の変化範囲の研究には終点がないのだ。最近九州などへの遠征が多くて，いつか二人で清澄の最後の時だったか思い出せない，しかし昨年4月中旬行方さんの英姿を胸にたどった清澄の山道は，感慨深く思い出される。折りから満開のミツバツツジが山の背のあちこちを飾っていた。

おそらくは君手折るらんミツバツツジ
　その手偲びて心かなしむ

咲き満てるミツバツツジの花枝捧ぐ
　雄姿を思い涙流るる」

私が郷台に赴任した昭和30年（1955年）の秋，倉田先生，行方沼東さん，お医者さんの若名東一さんなど5人で，折木沢の猟師鴇田さんの案内で元清澄から田代の部落までシダの採集にいったことがある。元清澄までは，手入れされた三石歩道だったが，元清澄の三角点のある下あたりからは，殆ど人の通った気配のない茨道（いばら）でとても歩けない。仕方なく鴇田さんが沢を下りましょうということで，小さな尾根を下がり渓際まできたら崖で，崖沿いにしばらく歩き小沢の出口を辷らぬように足もとを注意しながらやっと田代沢におりた。沢は水の流れはなく所々に水溜まりがある。よくみると溜と溜の間には細い流れがあり水が微かに動いている。勾配のない沢で，どちらが川上か川下か見極めがつかない，ただ崖ふちの枯れた灌木が根倒れして流れの方向を示している。切り立った斜面には，青木，さかき，しゃしゃんぽなどの常緑の灌木がびっしりと競いあっている。見上げると尾根にヒメコマツが行儀よく瘠せた両尾根に並んで立ち，その合間からさす陽の光が暗い谷間に筋をつけて落ちてくる。まさに幽谷深山の一幅の墨絵である。房総の地にもこんな景観がまだ残っていたのかなと不思議に思われた。沢は曲がり曲がり直線部分はほとんどない。小一時間以上も歩いて数十回目の曲がりが大きな曲がりを曲がった先の沢の辺（ほとり）に若いスギの林がみえてきた。もう田代は近いと急に元気づく，その造林地の中の小径（みち）を200 m程歩くと茅の生う休耕田の向こうに藁屋根が二軒ほどみえた。ここが田代の里である。訪ねるとお婆さんが独りで留守番をしていた。昔のままの国木田独歩の「武蔵野」にでてくるような風景である。お茶をご馳走になり遅い弁当にして，しばらくお婆さんに樹木の方言名などお聞きしたりして暇乞いをした。庭の柿の実が色づき，柚（ゆずりは）の厚葉が夕日を滑らかに照りしている。晩秋の夕日は昏れやすい急ぎ足で歩いてきたが，郷台に着いたときには真っ暗であった。羊歯の収穫はなにもなかったが，ただたっぷりと幽谷の自然に浸れたことは，何ものにもかえられない収穫であった。

柿一つ残照赤きばかりにて
　筵（むしろ）の豆に鶏（とり）のあそべり

木の実熟（う）るる常盤の森の季の移り
　ものあたたかう栗鼠（りす）の食みをり

〔白夜の翳〕より

翌日久留里線で帰られるので，藤林の自宅に寄ってもらった。妻のお茶で話しも短歌の方へと進み，妻は歌誌「山羊歯」を倉田先生と行方さんに渡し，その後行方さんのご健在のあいだ妻との歌の文通がつづいた。私の家から亀山駅の前を通り小櫃川の方へ下ってゆくと，川は二又となり，鴨川の方への笹川と清澄山を源流とする七里川に分かれ，ここの部落を川又という。奥秩父で住んでいた同じ名称に懐かしさを感じた。ここは旧亀山村といって昔この地に大亀が棲みつき村に幸をもたらしたという古説に由来する。古くは「上総望陀布（かずさもうだぬの）」の産地で，鎌倉円覚寺に残る弘安六年（1283年）の文書に「亀山郷」として記され当時は円覚寺の荘園であり，米や薪炭を納め小櫃川を利用して運ばれた。この水運は大正元年（1912年）県営の軽便鉄道（現在の久留里線）の開通で衰微して言ったという。その南に続く山なみの中で，ひときは高い山が三石山で山頂に応永年間（1294～1427年）覚恵上人の開山と伝えられる三石観音寺がある。山上から上総丘陵の嶺線や足元に広がる樹海がつづく。その奥で木更津の木炭業者の門馬商店が戦後「お勝手で，手を汚さず使える切り炭」のキャッチ・フレーズでkg詰め梱包木炭を売り出し好評となった。亀山駅近い台地に十数基の黒炭窯を築窯して炭を焼く。原木は伐採現場から循環式索道の連送用搬器で直送する。この索道は林業試験場の上田実技官の指導で施工された。上田さんとは10年程前に長野営林局の運輸営林署の署長をされているとき木曽谷で，スイスのヴイッセン集材機の集材実験の折りお会いし，その後度々利用研究会でご一緒していたので，私の近所の現場なので時折りお手伝いもした。そのころ詠んだ妻の歌がある。

映画「浮雲」のシーン浮び来つ
　赴任しゆかむ辺地なる町

この国の美味き米にて寿司をつくり
　食ぶれば泌みて母の思ほゆ

茅山のすすき一面刈られあり
　年越え屋根に葺くといふすすき

木材を運ぶケーブルと仂ける
　人らと寂（しづ）けき冬山過ぎ来し

激情のしづまりゆけば我が心に
　清き翳りの如き記憶よ

長き病しぬぎきし我がからだ
　やや潤ひて身ごもりぬらし

〔蚕豆の眉〕より

妻の病もだんだんとよくなり，翌年の秋に長女「まゆみ」を安産した。家は急に明るく賑やかになる。秩父から来てくれたお袋さんも大変よろこび安心して，長く逗留してくれた。三石観音寺から少し下った尾根に〔心縁常性信士，安永元辰年十二月十一日，ケシヤ村土ガマ半兵ヱ〕という供養碑がある。この土窯半兵衛は，相州足柄下郡吉浜村鍛冶屋の住人で，幼少から炭焼を家業とした父にその訓えを受け，20才を迎える頃にはもう一人前の腕前を身につけた。単身相州の山からはるばる海を渡り房総の地に足を運び，従来のモヂナ窯に変わる土窯式の製炭方法をうちたて良質の炭焼きの指導に盡力し，製炭の技術をひろめ一生をこの地で終えた。上総炭の名声をつくりあげた功労者である。地元では「土ガマ観音」として崇拝されている。安永元年（1772年）40歳位で入寂し，秋元村の三径寺に葬られている。また同じ職場の大宮重雄さんのお父さんが，私の住む藤林の隣り部落の松丘に住んでおられ，ちょくちょく来ては昔の話をしてくれた。若い頃は唐箕（とうみ）職人として仙台や青森あたりまで行商されたそうである。この上総地方で，上総の名の付くものにさきの上総炭，それに上総掘りは有名で現在開発途上国の農業灌漑用水の井戸掘りとして盛んに南の国々で活躍している。それにもう一つがこの上総唐箕がでる。話によると明治から大正，昭和も戦前までは，ずっと上総唐箕の需要があり，その生産は物凄いもので，関東一円は勿論北は東北青森県，西は新潟，長野，山梨，静岡あたりまで販売ルートがあって，上総唐箕の出張販売が縁となり他県から嫁に来た人，婿入りした人などの交流まであったとか。現在では機械化されて衰微したが，いまでもビール麦には，この唐箕選別が最適ときく。その材料は杉板と杉の小柱が主で漏斗状のところは穀物のすべり落ち易いように松の板，流し口の戸は始め板だったがトタン板に改良され心柱には樫材を使用してある。これらの材料は目のつまった真っ直ぐな清澄のスギ（TOEN7号に書いた「清澄の昔話」の建具材）・マツとカシの材は郷台，札郷産がよいそうである。一人一台作るのに三日程かかり，一台の値段は米一俵が相場だったという。

藤林から坂畑，折木沢部落をすぎ七里川に沿って上流に向かってゆくと蔵玉部落に入る。ここに虚空蔵菩薩堂がある。房総の三体といって横瀬，清澄，蔵玉の虚空蔵菩薩様の御神体は三体とも榧（かや）の同木一体と伝えられ室町期の作と推定されている。蔵玉小学校の眞下の隧道を通り抜けてゆくと道は次第に狭くなり，山の斜面に小さな水田が段状につくられ，鄙（ひな）びた山村の風景が漂う，視界が急に開け県道に寄り添うように流れていた七里川は，遙か山手に遠ざかっている。行く手を遮るように前方に高い山が連なり，いささか平坦な丘陵地にへばりつくように農家が散在する。黄和田畑部落である。標高364mの石尊山の麓の集落で，硫黄鉱泉の湧く温泉宿もある。この黄和田畑部落に1960年3月子供の火遊びから燃えあがった焔は，見る見るうちに藁屋根に燃

え移り，藁の燃え屑を吹きあげ次から次と飛火し部落の大方の藁葺家屋が焼失した。農繁期で大人達は留守で家財道具は丸焼けの状態に，早速連絡をとり，清澄作業所の学生宿舎のカラクサ模様の布団数十組を貸し出し，羅災者の方々のお役に立てた。この石尊山の山頂には阿夫利神社の石宮があり祭神は石凝姥命で，明和二年（1762年）に再建されている。石宮は高さ2m，幅1.2mの大きなものが中央にあり，両側には高さ1m程もある大天狗石宮と小天狗石宮がまつられている。石宮から196段の石段を下ると，旧境内と思われる平に二基の石燈籠と手洗鉢があり文久三年（1863年）九月，願主粕谷と刻まれている。石宮の中には，石段を作った時の棟札があり，当時の人々の名前が書き連ねてあり現在でも判読できる。名主，百姓代表，世話人，石工の人名に懐古さえ感じる。祭礼は3月28日と6月28日の年二回行われ，神楽の奉納や，近くの馬場では草競馬など行われ，近郷近在より多くの人達が集まり前後8回催されたといわれている。その競馬は明治30年代より大正初期まで継続されて廃止になったという。現在その馬場側方の林内に馬頭観世音の石碑が建っている。道は片側は七里川の崖岸をやっと車一台幅の狭い道となり，山手側も削り取った峭壁がつづく，素堀りの長い隧道を抜けて暫くゆくと堂沢の観音堂があり右の沢沿いの小径を登ってゆくと札郷作業所の裏に出る。左は吊橋で七里川を渡り四郎治林道へとつづく。以前は狭い橋板を並べた一本橋だったので，折角の四郎治林道も人の背で運ぶ他はなく，それをリヤカーの通れる幅の吊橋を架けてからは，炭出しも，木材もリヤカーや荷車で運べる様になり楽になった。これから200～300m行くと再び素堀りの三角形の天井の暗い隧道を手さぐりの状態で抜けると，札郷作業所の入口となる。川を渡ると湯ヶ滝の歩道があり，ここらあたりから美しい紅葉の名所となる。全山もみじとは違って南房独得の緑あり，黄あり，紅ありの色彩がバラエティーに富み美事な紅葉である。とくに白岩の懸崖のもみじは天下一品であろう。やがて道は四方木部落に近づいてゆく四方を山に囲まれ皺のような水系がまわりくねっている。そんな地形の処で水田を拡げるために「川まわし」という工作を施して，川の流れを変え川床と周辺の河原を田圃にする。川の流れは山腹を刳抜いて落とす穴淵が出来る。江戸時代の後期に施工したものでありまた灌漑用の水路も谷間の堰水を殆ど同じ方法で窟道でひかれている。測量器具のない時代によくも水平に近いような順勾配で山腹を抉り水路をひいたものだと驚き古老に聞いたら，長い竹竿で川底を基準にして測りつぎ高さをきめたということだった。また昔から「清澄男に四方木女」と謂があり，清澄の建具職人の技の優れた腕と男前に，器量美人の仂き者の四方木の娘さんは有名である。さて話を再び郷台の方へ戻そう，猪の川沿いに有民地をゆくと，乾期の日でも隧道の天井からポタリ，ポタリと水滴が落ちている暗い隧道をぬけると，東京大学演習林と書いた白い標杭が立ち眼前に滝が見えてくる。滝壺も広くて深い，終戦後郷台作業所勤務の職員が夜過って滝壺に落ちて亡くなったそうである。昼なお暗い茂みのあいだから，黒い岩肌を流れ落ちる白糸の様な滝水の風情には心悩ますものがある。晩秋には滝の周りが紅葉して急に華いできて錦の滝となる。ここの地層は黒滝層といって，地質学的には古く氷河期の樹木の痕跡など

が出現する。

花粉痕微量にとどむる石片は
　氷河期に消えし樹木と言へり

雪消水さばしる鮎の背の鰭の
　光りて碧し愛はいづこに

〔白夜の翳〕より

郷台から清澄にぬける郷台林道は，昔の房州と上総の國境で分水嶺の尾根を通る展望の素晴らしい道で，一名諸戸林道ともいい初代の土木学教室の諸戸北郎教授の設計ともいわれ，昔は車馬道として木材や木炭が運ばれた。所々に馬頭観音の石碑が立っている。峰々には道祖神の碑があり「山業人仲根十五ヶ村」と裏に記されて道しるべになっている。小高い尾根の天辺には「山の神」の小さな祠があり，山で仂く人達の山に対する信仰心が窺われる。遠くに太平洋を望み，鴨川，天津，小湊，勝浦などの入江がキラッ，キラッと細波の輝き，眼下にひろがる長狭米の田圃，その上に嶺岡連山が海に向かって走っている。道路をはさみ演習林側は欝蒼とした喬林が繁り，片側は雑木林の入会林がつづく。春には思いもかけぬ谷間に山桜の満開をみる。先の倉田先生の短歌のようにキヨスミミツバツツジが崖岩を咲き飾るハイキングコースでもあり，植物実習，造林実習のメーンコースである。

たたなはる九十九谷のをちこちに
　山の桜は夢を織りなす

〔白夜の翳〕より

私が郷台作業所在勤中には，折木沢，蔵玉，黄和田畑，四方木，清澄の各部落に製炭組合があり，毎年師走になると清澄の寮に各組合の代表者との懇談会があり，翌年度の炭材の払下地域の振り分けや，数量その他の打ち合わせやお願い事項の相談があった。その頃の製炭者数は200戸～300戸程あり一戸当たり500俵木位で，毎年12～15万俵木の立木払下げがなされていた。冬になると彼方此方の谷間から炭焼く窯の煙が霞のように棚引き，若いあねさんかぶりの娘さんが炭俵を背負う姿がよくみられた。それも燃料革命で石油やガスに変わり木炭の需要は激減し，山から炭焼の消えてしまうと同時に山林は荊刺の山となっていった。

窯出しに煤けし顔の炭焼を
　見ることもなし荊刺なる山

まき山の凹(くぼ)みに壊れし窯のあと
　恐れしものを焼きしごとみゆ

〔白夜の翳〕より

また妻が，この頃に詠んだ歌がある。

冬山の日向に幽か咲くすみれ
　今日ここに遊(すさ)べる現身(うつし)想ひぬ

岩伝ふ水流らへば山蔭に
　潤ひて清く稲は茂りぬ

春いまだ寒き山狭微かなる
　縁に垂りてヤシヤブシ咲けり

〔蚕豆の眉〕より

2. 銀杏の木

清澄は古くから信仰の山でしられ，とくに日蓮宗の開宗の地として有名である。一緒に勤務していた天津町出身の長谷川茂氏が『千葉県の歴史・史跡をたずねて〔9〕』に「清澄道に沿って～歴史と自然と」のタイトルで，文字通り痒い所に手の届くような丁寧さで紹介されておられる。この清澄山系には妙見山，麻綿原，石尊山，三石山，元清澄と宗教とのかかわりのある山々が演習林の周りをかこんでいる。山を宗教的な世界としてめぐる行為は，すでに奈良時代以前からはじまり，山の多くは水源を司る水分(みくまり)の神の座とし，精霊のこもるところ妄りに踏み込んではならない聖域として遙拝された。やがて山は人間の背負う罪と穢れを清めたもののみが入り，修行することの出来る浄地として，修行者が山神と交わる他界の霊地となり，修験者の験力を体得する場となった。多くの人達が営農活動のため平野部に集落を作るようになってからは，益々山は特殊な宗教世界として見られるようになってきた。と役(えき)の優婆塞(うばそく)の行状記に記されている。仏教と庶民とのかかわりを強めてきた最も端的な力は「死ぬと地獄へ堕ちる」という地獄世界の恐怖であろう。この地獄世界を執拗なまでに説いたのが，天台宗の恵心源信（942～1014年）であり，清澄山の最初の宗派でもある。罪を犯しながらも生きざるをえない人間の心の奥にまで，地獄世界を刻みこみ，現実の風景に接する以前に，すでに心のなかで地獄の風景を描かせ佛教を説く地獄世界は，そのままこの世と地つづきの恐ろしい現実として受けとめられていったのであろう。観音教は，おそらく〔水〕という人間のくらしに最も身近で根源的な要素に深くかかわることに，

その信仰の源流があるのではないだろうか。観音は水の流れをたどって，あらゆる地に移動し，大地に根ざした信仰の土壌として布教されていった。そのようなことを清澄に住む様になって清澄寺の別当上人や，日本山妙法寺の藤井日達上人からお法話をおききした。靄深い旭森の大杉の葉末から大粒の雫がポタリ，ポタリと落ちる音に人間の儚い願いをしみじみと感じる。

宿房に住みつける巫嫗密（いちこひそ）と逝く
　密柑の花の地に敷ける宵

藪のなか道祖神は鎮まれり
　褥の草に鹿の臭ひす

〔白夜の翳〕より

清澄には，房州長狭出身の歌人古泉千樫，茨城の長塚節の詠んだ歌や短編がある。1925年の千樫の「清澄山」13首のなかから。

ゆく道に隧道の口見えにしが
　山菅（すげ）背負ひて人のいで来れり

川上のこの道ゆきてふるさとの
　清澄山に今宵わが寝む

繁り深き清澄山にわれ遊ばず
　久しくなりぬ行きて今日見む

大杉の露のしずくの光りつつ
　み寺の庭は明けにけるかも

この山の繁き木立の露の色
　ほがらかにして朝日さしにけり

下りきつ薄（すすき）のかげにとまりたる
　鹿の目見（まみ）こそやさしかりしか

と詠んでいる。また長塚節の1906年の写生文「炭焼のむすめ」も有名で，その一節を抜き書きしてみる。

「小屋へ腰掛けて居ると鶺鴒が時々虫を銜へて足もとまで来ては尾を揺らしながらついと飛んでゆく，脇へ出て見ると射干が一株ある。射干があったとて不思議ではないが，爺さんの説明が可笑しいのだ。山の中途でいかなる時でも水が一杯溜まって居るので一杯水といってる所がある。そこにこの草があるのだ，極暑の頃になると赤い花が咲くのだと頗る自慢なのである。……清澄には猪が居る猪は山芋が好きで見つけたら鼻のさきで掘って仕舞う「うっかりすると曲角などで鼻さきを真っ黒にしたのに出くわすことがありますよ」とこれは爺さんの愛嬌噺である。」そういえば武者土の野獣園に鹿を飼っていたころ猪が出るので周囲を厳重な柵で囲ったとか，戦後間なく嶺岡山のレーダー基地に進駐してきた米兵に乱獲されて絶滅してしまった。文章はつづく「小さな山々が限りなくうねうねと連なって居る，格外の高低もない峰から峰へ一つ一つ飛越して見たいと思う程一帯に見える。渺茫たる海洋は夏霞が淡く柵引いたという程ではないがいくらかどんよりとして唯一抹である。じっと見ていると何処からか胡粉を落としたという様にぽちっと白いものが見え出した。漁舟である。二つ三つも見え出した。……妙見越を過ぎると頂上まで，杉の大木が密生して居る。そこにも羊歯や笹の疎らな間にぽつぽつと胡蝶花の花がさいている。一層しおらしく見える。清澄寺の山門まで来ると山稼ぎの女が縦板を負うたのや炭俵を負うたのが五，六人休んで居る……」。節はこの清澄の谷で金襖子をとったことを詠んだ歌がある。

鮠の子の走る瀬清み水そこに
　ひそむ金襖子の明かに見ゆ

我が手して獲つる金襖子を珍らしみ
　包みて行くと蕗の葉をとる

また炭焼の様子を次のように詠んでいる。

炭がまを焚きつけ居れば赤き芽の
　柘榴のうれに没日さし来も

炭がまを夜見に行けば垣の外に
　迫るがごとく蛙きこえ来

炭がまを這ひ来てひとり水のめば
手桶の水に樫の花浮けり

登場する「炭焼のむすめ」の美人なお秋さんは，清澄在住の同僚であった高橋浩幸さんの祖母の妹さんとお聞きして，益々親しさを感じた。清澄寺の山門の前を通り，妙見越の坂をこえると，源頼朝が馬をおり清澄寺に祈願したという，下馬不動の碑の下を通り，飛越，梨の木台，菖蒲沢と一杯水林道を歩いてゆく，本沢の谷をはさんで対岸の大平（おおべら）のスギ，ヒノキの美事な造林地が眺められる。夫夫が春夏秋冬針葉の色の違いをみせてくれるので，造林実習の時その識別を説明をする。この道の奥に紫陽花（あじさい）の名所麻綿原がある。麻綿原は房総の高天原（たかまがはら）ともいわれ，外界から隔絶した秘境で，下界を見渡す景観は雄大で 360 度のうち清澄山に面した一部がモミの天然保護林のため視界を遮るほかは，勝浦，九十九里の太平洋から房総の内陸，千葉市方面の東京湾まで見渡せ，大気の澄んだ秋晴れの日には富士の霊峰が拝められる。所々から縄文初期の土器の破片や，貝塚らしい跡から貝類が出土し，狩猟時代の生活の片鱗が窺はれる。麻綿原の名称も古代麻や綿を栽培していたところからであろう。また日蓮上人が，旭に向かい初めてお題目を唱えた所もここだという説もある。建治二年（1276 年）には麓に妙法寺が，慶長二年（1597 年）には法王寺が建立されたとしるされている。しかしいつのまにか廃寺となり，文政二年（1819 年）妙法院天徳寺が建立され，修験行者のいた二ヶ所もあった。江戸時代十返舎一九は，「房総ひざくりげ金草鞋」の中で，「豆原初日峯」として清澄から大多喜方面に行くコースに挙げている。明治初年天徳寺が山火事で焼失してからは次第にさびれて，遺品の一部が清澄寺の宝物館に陳列してある。私が千演にきた当時は，まだ道がなく菖蒲沢沿いの尾根径（みち）を越えていった。丁度千演では初めての循環式多荷重索道を架設する時で，萱葺の荒屋（あばらや）に一人の僧侶がいて，これらの話をしてくれた。それが蓑和日受師で，この寺を再興したいが，花の咲く緑の灌木は何がいいだろうと相談をうけ，紫陽花はどうだろうと話をした。その後上人は独力でコツコツと紫陽花を植え拡げられ現在の天拝園を紫陽花の名所に造りあげられた。いまでは十万株以上もあるという。かくも山奥を一種類の花のみで埋めつくした上人の心情を思い，その夢を思う。果てしない紫陽花が夜露に育つ花の夢を詩人金井直氏は短編記「蓑虫記」にこう書いている。

「私がかくまで清澄行きを促したものは，紫陽花である。私は紫陽花の量感あふれる花房にもまして，あの紫青色の深さが好きである。紫陽花をみると私は海を感じる。海の深さと懐かしさを感じる。この懐かしさの情は，み知らぬ人の面影に触れる心の仂きによるものである。紫陽花に私は水を思う。紫陽花はまぎれもなく私にとって水の精である」。と書いている。妻もまた紫陽花を詠んでいる。

脱ぎわすれられしはいづこ紫陽花は

聚めしごときむぎわら帽子

あぢさゐの茂りてせまき路ゆくに
花より雨の雫こぼれつ

〔蚕豆の眉〕より

私もまた紫陽花の藍の儚さと，冬枯れの花殻を詠んだ。

退化せし雄蕊雌蕊をだきしめて
藍ふかみゆくあぢさゐの花

蝕まれ冬を惚けしあぢさゐの
花の骸(むくろ)に顕てる影あり

〔白夜の翳〕より

清澄寺の境内から武者土の苗畑へ下る道は急な坂で，日本山妙法寺の仏舎利塔の下を通ってゆくと稚子滝にでる。けだし安房地方随一の滝で，滝壷も深く清らかな水が附近の常緑広葉樹林と迎合しあって滝の品格をつくりあげている。この本沢を下っていくと坂本部落の入口近い処に，バクチノキの保護樹があり，日本産樹木分布図集の中で倉田悟先生は次のように書かれている。「本邦産のサクラ属樹木の中で常緑性のものはリンボクとバクチノキであり，両方とも千葉県清澄山に自生してゐる。リンボクはなんなく見つけたが，バクチノキの方は安房側の谷間に限られ，直ぐには見参できなかった。夏休みの製炭実習のおり，炭が焼き上がるまでの1日，のんびり胴乱をぶら下げて本沢を下った。路傍の崖上に特異な樹膚とてらてらした大きな葉ですぐバクチノキとわかり，よじ上って採集した，小枝には重なった苞に包まれたまだ小さい蕾の花序がついているのみだったが，大事に大事に胴乱に収めた。その後道路の改修でこの木は消え去った。しかし演習林入口の川縁の保護樹はいまも健在で，稚苗も点々と生じ，辺りの樹幹に匍い上がるヌカボシクリハランとともに暖国なるかなを思わせる。清澄演習林に勤務される成瀬さんの奥さんの歌。

みんなみの海辺の国の冬ぬくく
いづくに行くもクコの萌えたり」

清澄作業所の事務所の前に，1928年昭和天皇御大典記念植樹の銀杏が30余年の樹令を経て，

みずみずしい新緑を茂らせていた。銀杏は春は若葉，夏は深い木蔭，秋は黄葉，冬は裸身と姿をかえ，ギンナンの実を食卓にとどけ四季を通して人を楽しませてくれる。詩人金井直氏〔公孫樹〕の一節である。

一本の公孫樹の古木が足下に，黄金の
　雫を落しながら　虚空のふかさを
究めようと「時」のページをめくって
　いる
しかしページ数はかぎりなくて
　もはや読み了えることができない

落ちた雫から育った樹がいつかまた
　古木となる日まで読みついだとて
それをくりかえしたとて
一体　誰が閉ざせるだろう
絵画殿の扉のように

〔詩集 id〕より

妻もまた，この銀杏の樹を詩にしている。

ダークグリンの葉を贅沢なほどに拡げて
　空をおおうている銀杏の木
何拾年とも知れぬ前から　此処に立ち
　雲と　風と小鳥とのみ話をしている
風情なので，今日　根方の芝生の中に
　熟した　黄色い実が落ちているのを
見つけると，人人は思い出したように
　高木の梢を　ふり仰ぐのだった
過ぎた夏の陽光を惜しみなく吸いこんだ
　精悍な葉は
今や　どっしり落ちついた　中年の色
　秋から　冬とつづく季節の　その
舞台裏のあわただしさは

一日晴れると　今日は又雨……
その変化をも　愉しむように

ふさ　ふさしたおびただしい葉を
合着のマントのように羽織った　銀杏は
あうむいてみて　その在り処をさぐろう
としても　見えない
ぎんなんの　丸い実を
青い乳ぶさから　時折鷹揚にしたたらせ
まだ　あわてるようすなど
これっぽっちもないのだ

〔詩集雪・銀杏の木〕

十有余年暮した清澄は，私達家族にとっては第二の故里のような気がする。そこで詠んだ妻と私の四首ずつを書いてみる。

清澄山にみたびの冬を迎ふるに
今年は君あり水仙たまふ

一日を山に仂きし老人は
雨にぬれとほり今帰りこし
大勢の中に交りて夫もゐる
山行き行きて柿取る今日を

峡こめし吹雪にもブルトーザー仂ける
絶えまなく山崩し土を運びつ

〔蚕豆の眉〕より

荒縄に吊るされし干柿張り満てり
簷の裘一つ下がりて

汗拭くとぬぎし麦稈帽を野佛に
あづけて尾根の風にふかるる

老い樟の若葉の香り淡くして
　靄につつまる清澄の宿坊

元禄とかすかに刻む野佛の
　目瞑むるかたちなにをゆめみる

〔白夜の翳〕より

3. 白いかげ

「世界の青空が東京に集まりました。世界の目と耳が，この国立競技場に集まっております」1964年10月10日第18回東京オリンピックは，大成功裡に終わった。酔いしれた国民の感情もさめて，空虚さが漂いはじめた。ベトナム戦争は米軍の無差別爆撃，枯葉作戦にまですすみ無惨さを増してゆく。政治は「黒い霧」の暗黒政治となり，もってゆきようのない世相の中で，1968年1月東大医学部学生自治会は無期限ストに突入した。これを契機に学生闘争の烽火は燃えさかり，ついに1969年1月の東大闘争は安田講堂の攻防戦に発展し，学問の殿堂は哀れにも廃虚と化してゆく。そしてそれが導火線となり林学闘争がはなやかにくりひろげられ，演習林へも燃えうつってきた。この間妻がどれだけ心配していたかは，死後遺歌集の整理をしていて初めて知った。そしてその秋妻は急逝した。

夫の哀しみわれの胸をもひたしくる
　われらいつよりか羊水に浮ぶ

水に浮きゐる西瓜の縞目恙なく
　夏ゆかむとしわが身軽けれ

深き湯呑にお茶なみなみと注ぐとき
　喉佛高き家長の孤独

電話のかなた名状しがたき混乱ありし
　気配はわが胸に差す

〔蚕豆の眉〕より

そして，私自身も次のような歌を詠んだ。

同志に別れ主義(イズミ)に訣(わか)れ降る雨に
　濡らせる肌はぬるるに委す

若き日の叛旗はいまもあざらけし
　掲ぐことなくいま老いるとも

〔白夜の翳〕より

私は妻にまで苦労をかけさせたことを心よりわびた。次の歌は妻が死の寸前に病床で詠んだ歌である。

幽暗のいろまさり来しわが窓べ
　幻に似てあやめ咲くなり

眉持てる蚕豆を剝くわが死後も
　人が剝くらむ蚕豆の眉

〔蚕豆の眉〕より

しかし妻は，私の運動をよく理解してくれ助勢もしてくれた。

1971年突然房総スカイライン構想が県会に提出され問題化してきた。演習林の一杯水～郷台～三石の各林道，歩道の分水嶺の尾根を通り東京湾と結ぶというものである。自然破壊も甚しいと，千葉県自然を守る会，みちくさ会その他各種保護団体が一斉に立ちあがり反対運動が始まった。日本産樹木分布図集にも倉田悟先生の房総スカイラインの一文がある。「最近は各地に観光道路ができて，私自身もずいぶんその恩恵に浴している。長野駅から戸隠への道など，以前は2時間もかかったかと思われるほどだが，今は40～50分で戸隠高原に立つことが出来る。しかし，むやみやたらにマイカー族共を喜ばせるだけの観光道建設は反対である。千葉県が建設するという房総スカイラインなどは，断然その計画を撤回し，その莫大な費用を既設道路の整備に充てれば，地元住民に益するところが大であろう。房総半島にはすでに，半島を一周する立派な道があり，海の景色を楽しむにはそれで十分である。高々300 mばかりのところに道を通したところで，海の展望も山の展望もどれだけ良くなるというのだろうか，房総の低山では現存の谷間の道や峠道を整備して静かな山村風景を楽しむのが最もふさわしい観光開発であると思う。いわんや房総スカイラインの建設により，房総国界に残された貴重な自然に大損害を与えるにおいておやである。同地方に生き続けて来たニホンザルの群れも，伊豆半島にも自生しないのに過去の地史を担って，この国境山脈に点々と自生するゴヨウマツ達も，今や人間の叡智やいかにと，不安な

面持ちで見守っているに違いない」。

また妻も「草の実」の会誌に「房総スカイライン反対運動に参加して」の一文を投稿している。「戦後二十数年もたった現在は，民主主義，地方自治などの言葉になれ，むしろ当然のこととして深く考えようとせず過しがちの私達ですが，現実の姿はどうなのでしょうか。政治を自分達のものにする為には，国民の一人一人が絶えず勉強し，政治を監視し，政治に対して主体的な姿勢を持ちつづけなければならないのですが，現実にはこの国を支配する保守政権の大きな網の中にすっぽり包まれ，日常生活の中に埋没し，日々生きて動いている繁雑な政治行政の外に目かくしされた鬼のようにはじきだされたかっこうで，何ごとも既成事実とやらを横行させ，気付いた時は，もうおそかったという例があまりにも多いのではないでしょうか。はからずも，私の間近に，その政治の荒い波が及んできそうになった「房総スカイライン」のことにつき，私の目や心にふれた範囲での報告を書いてみたいと思います。私の住む千葉県で，今，全国各地の景勝の地に開発されているスカイラインを，ぜひわが県にもと，東京湾側の富津から，鹿野山，高宕山，清澄山等の主稜線伝い，太平洋側の勝浦まで通そうとする，観光有料自動車道路が計画されたのは，もう何年も前だったとのことですが，このスカイライン建設予定地は都会からそう遠くなく，険しくもなく，よく昔からの自然相が残されたハイキングコースとして，人々に親しまれ，二つの国定公園地域，国指定天然記念物ニホンザル生息地，七つの鳥獣保護区，二つの県立自然公園等々がめじろおしに並び，さらにその大部分が水源涵養保安林となっている宝石のような千葉県のかけがえのない地域だったのです。勿論この計画にも過疎対策といううたい文句はあげられていましたが，途中下車もままならず一直線に料金所につっ走り，排気ガスをまき散らす観光道路がほんとうに地元の利益になるのでしょうか。道路開発によるいたましい自然破壊の例は全国各地に見られるのですが，殊にこの千葉県の山々は，後に編成された「房総の自然を守る会」の世話人高杉欣一氏によれば，第三紀層の軟弱な地質が，自然林の繁茂によって保たれたいる地域とかで，ブルトーザー等の機械力の開発にはひとたまりもなく，深からぬ山の破壊は崩落をよぶ暴挙とのことでした。しかしスカイライン建設推進者である県当局の荒々しい感覚は，高宕山の国指定天然記念物のニホンザル生息地をまっぷたつに切りさく設計になっていて，文化財に手をふれることになり，県と文化庁の接触が始まり，文化庁の文化財保護員山階鳥類研究所長，古賀元動物園長を加えた「スカイライン県審議会」が発足したとのことです。……しかしこのようないきさつが新聞に報道されるに及んで，世論もまた騒ぎ出したのでした。学術的にも大変貴重であり，飲料水その他私達の生活を守り，私達の魂の安らぎである，限りない優しさを秘めた繊細な自然，次代への大切なおくりものである自然。それらを破壊してはならない，何としても守り抜こうという声は県の各地にあがり始めたのでした。そして「房総の自然を守る会」が誕生していったのです。私の夫も清澄森林研究会の一人としてスカイライン反対運動に参加していました。私自身何年か清澄に住み，ここを第二の故郷とも思っている愛着心から，ぜひこの自然を守

りたいと決心したのです。……草の実会の知人のだれ彼に，手紙を書き署名への協力をお願いしたのです。どなたも快くご承諾，お骨折の上署名簿を作り送って下さったのです。九月二十六日には，千葉市で「房総の自然を守る会」の発会式があり，学生，学者，山岳会，干潟，新浜を守る会の方達に交わり草の実の有志も参加，午後からの激しい雨の中をデモ行進しました。……このような運動がしだいに効を奏したのと，自然保護の声の全国的な高まりを県当局も無視できず，スカイライン計画は一時中止ときまり，反対運動は一応成功したといってよい結果になったのです。……」

この内助の妻を亡くした私は，ただ呆然として何にも手につかず，じいっと天を仰ぎ涙する毎日が一年余りもつづいた。或る日上飯坂実教授から「元気ですか，岩手から大河原昭二教授が上京されるので，久し振りにお茶でも飲みながら話でもしませんか」と電話があった。そういえば大河原さんとは久しく会っていなかったので出かけることにした。食事をとりながらお二人で私を励ましてくれ，繋留搬器の新アイデアの構想などおききし，私もこのままではと感じて帰った。そして1980年森林利用研究会の現地見学地として，岩手大学大河原昭二教授考案の「岩大式簡易集材法」を瀬場沢に架設することにした。毎日郷台へ通い現場指導にあたった。無理に無理を重ねて体の疲労をおぼえたが我慢しながら完成に近づけ試運転の朝，突然頭脳から血の抜けてゆく様な感じがし気分が悪くなり慌てて病院へ，そのまま千葉大脳外科に入院，脳梗塞と診断されたときは，左半身麻痺となってしまった。四ヶ月入院中，夢中でリハビリーに励んだ結果自分で少しは歩ける様になり退院して，不自由な躰で運動がてら出勤はじめたが，停年を二年程のこし1982年7月に依願退職をした。それから4年間家にてリハビリーの斗病生活であった。

息とめて生命断つことかなはざり
　深く呼吸(いき)して涙するのみ

病だき静かに寐ぬる春の宵
　かかることをも倖かと思ふ

脳梗塞みづから耐ふるほかあらぬ
　歯を食ひしばり励むリハビリ

たくしあげたくしあげつつパジャマ脱ぐ
　脳梗塞の麻痺も剝がんと

〔白夜の翳〕より

日常生活にも，然程不自由しなくなるまでに恢復し，そこで肉体的にも精神的にも自立と自信をつけるため，単身短歌詠草の旅を思いたち，八丈島，礼文島，中国の桂林と出かけ，1987年には「帝政ロシヤ古都の旅」に出かけた。これら407首を「白夜の翳」にまとめ1991年10月に出版した。

美しくストレリチヤの咲きてをり
　流罪のままに終えし墓訪ふ

（八丈島にて）

丘の面(おも)花咲く赤し夏まひる
　北の果なる島のまぶしく

（礼文島にて）

煉瓦倉庫(いしぐらの)のさびれし影を沈ませて
　水は眠れり小樽の運河

（小樽にて）

外国(とつくに)の文学語る周青年
　わが青春は疎(うと)ましき戎衣

（桂林にて）

天窓のステンドグラスを透(す)きし陽は
　褪せたるイコンとわれを彩る

（モスクワにて）

応へなく白夜に消ゆる翳として
　重く垂れたる緞子(どんす)のカーテン

（レーニングラードにて）

IV. あとがき

駅は人の集まる場所である。けだし人が来て，人が去っていく駅でもある。そして誰もいない。私の乗降する外房線の太東駅はそんな田舎の駅である。人が行ったり来たり，出たり入ったりしているが，誰一人としてここにとどまる者はいない。立ち去ってみてその駅や街や人の風景を思い出してみる様に，職を退いてみて，初めて職場の風景をなぞってみる。山や林や森や川の自然の中で暮らしてきた人，人の顔が美しく脳裡に浮かびでてくる。演習林は私の人生にとっては，総てといっても過言ではない。そこで働き，生活し，子供達を育ててきた。その苦しみも，楽しみも，よろこびも，かなしみも深く味わってきた。私の胸の深い奥処(おくど)では懐かしい風の韻(ひびき)がいつもたのしく音楽を奏でている。それは甘い哀しいひびきでもある。そしてその音韻は，私の肉体

が滅びるまで奏でつづけるであろう。

この度東京大学演習林100周年記念事業として，回想記録の収集をなされ，私ごときにもお誘いをうけ光栄と思っている。拙文を書き連ねたが〔風韻〕として書きとどめることの出来たことは望外の喜びであり，厚く感謝する次第である。尚そのために，秩父演習林長伊藤幸也講師，飯出七郎氏，千葉演習林佐倉詔夫助手，鈴木誠助手，ならびに鈴木保技官，糟谷重夫技官，鈴木亀吉氏の諸兄より心よく資料をお送りいただき厚く御礼申し上げる次第である。

存在を離れて落ちゆく星のあり
　闇へ消ゆるもひとつの証(あかし)

野の道にゆらぐ芒(すすき)の影杳(くら)し
　韻きをもたぬ風の過ぎゆく

（1991年12月）